
SINCERE シンシア

蒼嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SINCERE シンシア

【ΖΖtheid】

N4400A

【作者名】

蒼嵐

【あらすじ】

31世紀の地球。宇宙戦争の最中、主人公セイドは怖いほど綺麗な娘を見掛ける。綺麗…、だが妙な娘。数人の惨殺された人々の真ん中に佇んでいた少女。セイドは、『妙』なことはわかつていたが、何故か心惹かれた。数年後、宇宙戦争の兵士に招集され、嫌々ながら戦争に参戦していたセイドは、あの少女と再会する…。

第零話　「」との始まり　事件（アフロア）（前書き）

お手にとつて頂き（？）ありがとうございます

恋愛SF

SF食は軽めの　三人称小説です

現在　手直し中

長々と放置で下さいません

第壱話に続き第弐話も　大幅に手直しました（つもり）　ストーリーに変化はありませんが　情景描写等　今現在の私の技術で出来る限り増やしました（つもり）

よければ「」覧下せ

第零話　Jとの始まり　事件（アフュア）

西暦3021年。

地球は、一つの国に統一されていた。地球共和国（リパブリック
オブ　アース）、略して『R・E』。

「セイドー。早く」飯食べなさい
「ん」

セイドと呼ばれた少年はTVを見ながら無意識に母親に返事をした。

色素の薄い灰色の髪と綺麗な青緑色の瞳を持つ少年である。彼の
目の前には朝食。TVを眺めてすっかり手が止まっている。

TVでは、昨夜起こった奇怪な事件が報じられていた。数箇
所の刑務所より女性囚人だけが忽然と姿を消したのだ。外にも中に
も全く痕跡がなく、セキュリティもかなり発展している31世紀の
地球で、前代未聞の事件。行方不明者は1000人にも上った。

「Jーーらつ、セイドー！　学校遅刻するよつ
「……あつ、はいはいつ

コースに集中していたセイドーは、母親に急かされ我に返る。慌
ててご飯を口にかき込んだ。

「ねえお母さん。捕まつた女の人がいなくなつちゃつた事件。変
な事件だね」

急かされていたにも関わらずセイドは、のんびりと学校に行く準備をしながら母親に言った。

「そうねえ」

「でもさ、これって悪い人がいなくなつたってことでしょう？ 良かつたね！」

当時、『セイド』こと『セイクリッド＝リーンカルス』は8才。当然ながら、この事件の奇妙さを理解しきれておらず、ただ『悪い人がいなくなつた』と軽く喜んでいた。

その後、この事件は3年に渡り数回繰り返された。犯人は特定出来ず、事件はそのまま迷宮入り。多くの女性が行方不明のままとなつた。

第壹話 白き少女 神秘（ミステリー）

西暦3028年。

『敵襲つ！ 上空100万kmに敵星の戦艦を発見！ シエルターへお急ぎ下さい！』

屋外にたくさん設置されたスピーカー。危険を知らせるサイレンと共に、けたたましく男性の声が響く。

「セイドー！ 早くしろ！」

「今行くつ」

父親の怒鳴り声にセイドは大声でかえした。

思春期の少年に成長を遂げたセイド。細身の体だが長い手足、すらりと高い身長。既に父親よりも大きくなっていた。

セイドは眉間に皺を寄せつつ、大事な物だけを大きな鞄に詰め込む。軽く溜め息をつき窓から空を見上げる。相変わらず外のスピーカーからけたたましく響く声。どんよりと曇つた空。時刻は現在4時。曇り空のせいかいつもより薄暗い。

セイドは曇つた空を軽く睨み、大きな鞄を持って家を出た。

（全く……、何だつて今更戦争なんだ？）

セイドは心の中で文句を言いながら、両親と供にシェルター（避難所）へ走る。

シェルターへの道のりの途中、建物の陰より人々の苦痛に満ちた叫びと鈍い打撃音が微かに響いた。両親は気付かなかつたが、セイドはその音が否に耳に入り足を止めた。（なんだ？）

なんのけもなしにセイドは建物の陰を覗き込む。そして、息を飲んだ。そこには。

沢山の人々の死体。

手や足、時には首を切られた惨殺死体。立ち込める血の臭い。そんな中に、妙に鮮やかに映える血の赤。吐氣を覚える程の光景。そして、その真ん中には一人の少女が佇んでいた。華奢な体に細い手足、小柄な身長。腰まである長い綺麗な銀青色の髪。

体じゅうのあちこちに血を浴びた様な少女が、セイドに背を向け立っていた。

少女は人の気配に気付き振り返った。瞬間、二人は目があつた。

少女の瞳は、鮮やかな、赤。

セイドはまた、息を飲んだ。

真紅の瞳、驚くほど美しい少女であった。年齢はセイドとあまり変わらなく見える。何やら焦點の定まらぬ瞳をしている。

虚ろとも言える瞳が、静かにセイドを見据える。

「何ボサツとしてる。死ぬぞっ」

が、すぐ父親に引っ張られ、少女の姿は見えなくなる。

当時、セイクレッド＝リーンカルスは15才。

この年、突然何処だか分からぬ星が地球に攻撃をしかけてきて、宇宙戦争が始まった。

31世紀の地球。かなり宇宙への進出も果たしていたが、未だ地球が見つけることのできない星である。

そんな最中セイドは、驚く程綺麗な娘を見た。

とても妙な所の多い娘。 たくさんの惨殺死体の中で一人で立たずんでおり、全身に血を……、返り血の様な物を浴びている。年齢はそうセイドと変わらない。透き通る様な白い肌。綺麗な銀青色の髪。印象的な赤い瞳。見る者の目を奪う美しい容姿。 とても妙な娘。だけどセイドにはそんなこと関係なかつた。彼女に目を奪われた。見目の美しさだけではない。

彼女の何がが、全てが、セイドの目と心を釘付けた。

その後、父親は戦争に兵士として借り出され戦死。母親はセイドをかばい逃げ遅れ焼死。セイドは親戚の家をたらい回しにされた。そして17になつた時、兵士の募集礼状がセイドの元へ来た。戦争になんて手を染めたくなかった。だけど、親戚の家をたらい回しにされる生活は地獄だつた。何より募集礼状は、絶対だつた。兵士にならざるを得なかつた。

西暦3032年、現在。

セイクレッド＝リーンカルス、19才。

「おーい、セイド！」

一人の男がセイドを後ろから呼び掛けた。

「ああ、リラ。何？」

声に気付いたセイドは振り返りつつ言つ。

「『リラ』じゃねえ！！ 女みたいな名前で呼ぶなっ！ 『ライアン』か本名で呼べよ！」

「『リラ』って可愛いじやん」

セイドを呼び掛けたのは、『リラ』こと『ライアン』こと『リラ・イアンス=カーライド』。セイドと同じ年の19才。緑色の瞳に、腰まである長い茶色の髪を一つにまとめている。彼の本来のニックネームはライアンである。が、セイドは女性を思わせる程の長い髪を持つリラへの冗談でリラと呼んでいた。

「ところで何？」

「二ツクネームのことでモメた後、ようやく本題に入った。

「ああ。隊長がお呼び」

セイドの問いにリラが答える。

「なんで」

「明日の攻撃、セイドに操縦してくれつてさ」

「やだよ」

「自分で言つてこよ」

隊長の意思を伝えただけのリラにて、セイドは思いつきり嫌な顔して否定した。リラは溜め息で返す。

「これは、核。^{ニア}

核の空軍基地兵士訓練場。核とは、地球共和国の中心。地理的にではなく、機能的の中心である。

政治から科学・医学・軍事力・警察・司法・学校まで、地球上の最先端の集まる場所である。場所は太平洋のほぼ真ん中、海底の更に地中。数箇所からのワープでしか行くことができなかつた。

セイドとリリは、宇宙戦争の兵士に招集され、核の空軍基地内兵士として生活していた。兵士の灰色の制服に身を包み、攻撃へ出る日以外は核内の寮で生活し、日夜訓練に明け暮れる。

空軍兵士隊長室。

セイドは制服に乱れがないかをチエックし、軽く咳払いをする。そして扉の横の壁にあるインター ホンのボタンを押す。

「隊長。セイドです」

セイドはインター ホンに向かつて張りのある声で言つ。

「入れ」

インター ホンより隊長の低い声が響く。と同時に、扉がシュンッ という音をたて開いた。

セイドは1歩隊長室に足を踏み入れ背筋を正し、右手を振り上げ 敬礼をした。

「空軍兵士第1班副隊長、セイクレッド＝リーンカルス。参りまし たつ」

セイドは空軍兵士第1班副隊長……、事実上の空軍兵士全部の副隊長を努めていた。

背は高くも細身の体、とは裏腹に大変な運動神経、何より大変な 戦闘感覚の良さで、若干19才で異例の大抜擢をされてから既に半 年が経つていた。

「ライアンから聞いたか？」

隊長がセイドに聞く。

「はい」

「そうか。じゃあ頼む……」

「单刀直入に言います」

セイドは隊長の言葉を遮り口を開いた。

「絶対つ、嫌です」

その言葉に隊長は怪訝な顔をする。

「何故だ！？」

「何故も何もないですよつ！ 僕はつ、1号機専属のパイロットですよ！？ 明日は2号機と3号機の出撃の日じやないすか！ なんで俺が操縦しなきやならないんです！？」

「お前のが腕がいいからだ！」

「んなこと関係ねえです！」

隊長相手に崩れた敬語で怒鳴りつけるセイド。隊長室から漏れて響く二人の声。

これはいつもの言い争いだった。

隊長室の外では立ち聞きするリラ。呆れつつ溜め息をする。
(コイツはまあ、隊長相手に良く言えるよな)

セイドはまた、空軍艦1号機の専属パイロットも努めていた。

軍艦は、数字が小さいほど最新針で、大きく、操縦も扱いも難しい物となっている。現在1号機の操縦が出来るのはセイドのみとうほど、1号機の操縦は難しく、同時にセイドの戦闘能力は優れていた。

またリラも、セイド同様の空軍第1班の兵士である。第1班の副隊長がつまには空軍兵士全部の副隊長であるという様に、要は第1班は腕的にエリート集団である。セイド程ではないがリラも、戦闘能力が高く第1班入りをしていた。

二人は空軍兵士第1班の最年少兵士であった。

「お前はよく隊長相手にあそこまで言つよな。毎度のことだけどよ」

隊長室からの寮までの帰り道、リラが呆れて口を開いた。

「だつて隊長だからつて遠慮してたら人の意見無視されんじゃん」

セイドは眉間にしわを寄せて言つ

「俺は戦争なんて大つ嫌いなのつ！だから必要最低限しか動かないよ」

セイドの瞳に怒りと悲しみの色が浮かぶ。セイドは、この宇宙戦争により両親を亡くしている。よつて、戦争に手を染めてしまつている自分自身が、今の状況がとても嫌だつた。

セイドの『戦争嫌い』の理由をリラも知つてゐる。だがリラは、あえて軽く流す。

「まつ、戦争が好きなヤツなんてそういうねえだらうけど……、ん？
おっ！ セイド！ あれ見ろ！」

リラは自分の言葉も言い終わらぬうちに、喜々としてある方向を指差した。セイドの肩を思いつきり揺さぶりながら。

ここは、核の中の科学研究所。寮への近道となるため通つていた。リラが指差したのは観察室といつ、廊下に向かつた壁が1面窓という部屋。中は、壁には所々に小さな何かの機械がついてるもの、ほぼ真っ白な無機質な部屋。その隅に一人の少女が腰を下ろしていた。

「おい！ あの娘つ、すつげ美人じゃね！？」

リラは彼自身の女好きという性格も手伝つて大騒ぎ。セイドは、あまりの話題の変化に呆れつつも、その少女に目をやつた。その瞬間……、セイドの中で何かが弾けた。

（あれ？ あの娘……）

「しつかし……、あの娘なんであんなとこに居るんだ？」

リラが首をかしげて言つ。無理もない。『科学研究所の観察室』と言つくらいの部屋、本来は研究対象を観察するための部屋である。リラはこの廊下を良く通るがいつもは植物か動物がいる部屋である。『人間』がいることはおかしいはず。

が、セイドにリラの面葉は届かず、そんな不思議にも気付かない。

セイドは観察室の中の少女に目を奪われた。

奪われつつもセイドの中で弾けた『何か』を探っていた。

（あれ？ なんか見たことある……？ うん。あるよ……っ）
（記憶を少しづつ遡って行く。）

（もしかして……、あの時の……？）

セイドの中で一つの記憶が鮮明に蘇る。

（もしかしなくとも……、あの時の……っ！）

セイドの中で蘇った記憶は、15才の時に見かけたあの少女。宇宙戦争が始まった頃に見掛けた少女。全身に血を浴びて、たくさんのが殺死体の真ん中にたたづんでいた、あの少女。

「あの時のあの娘だ！」

セイドは思わず声をあげていた。その時。

「あなた……、シンシアのこと知ってるの？」

セイドとリラの後ろから、女性の声が響いた。振り返ると、白衣を来たこの研究所の科学者であろう女性が立っていた。ウエーブのかかった肩までの金髪の髪、澄んだ青い瞳。細身でスラッシュ背も高く、張りのある声。20代の綺麗な女性である。

と、いろいろ見定めていたのはリラだけで、セイドはそれどころではなかった。

「シ……、『シンシア』って言つんですか！？ あの娘！…思わずその女性にセイドは駆け寄った。

セイドは、あの日よりあの娘が忘れられなかつた。

確かに妙な娘。だけど一度目があつただけの娘、何故こんなにも気になるのか。自分でもわからなかつた。

「え……、ええ。多分そつよ」

セイドの喜びとは裏腹に、女性からは曖昧な返事が返ってきた。

「あなた……、あの娘のこと、知ってるんじゃないの？」

「いえつ、小さい時に一度見かけただけです……。つそれよりつ、『

多分』ってどういうことですか！？」

セイドは、再び女性に詰め寄る。はやる気持ちを、押されられず。

「ちょ……、ちょつと待つて」

女性はセイドの勢いに押されつつ言った。

「あなた達一体誰？ 正確な名前と身分が分からないと、そんな詳しく教えてられないわ」

「……えつ」

女性は、セイドとリラの身分証を手渡され驚いた。

「空軍第1班の兵士ー？」

空軍を初めてとして、軍の兵士の中で第1班となると腕的にエリーート集団であるということは、核にいるものなら皆がしこと/or>であつた。ひとしきり驚いた後この女性は、一人の顔を見て感心した。

「じゃあ……、あなた達があの有名な……」

「有名？」

「ええ。だつて、兵士になつてすぐ第1班でしょ？ 有名にもなるわよ」

兵士になつてすぐ第1班入りを果たすのも、10代で第1班入りを果たすのもセイドとリラまで誰も成し遂げてはいなかつた。

女性の誉め言葉に、おだてられ易いリラが髪を搔き上げつかつこつけて言つた。

「まつ、それほどでも……」

「特にセイクレッド君ー」

「…………」

そんなリラの言葉を遮り、女性はセイドに話しかける。「え……、

俺ですか？」

「そう！ なんたって、副隊長な上に『号機のパイロット』でしきう？ 淫いわ

ま、いいけどねえ。俺なんて史上最年少とはこえ平兵士だし。んな空軍兵士最強の男と化してるセイドと張り合おうなんぞ思つてねえよ と、後ろでブツブツするワニ。

「フロンティア＝ファスターさん？」

女性ことフロンティアの身分証を見てセイドが言へ。

「ええ。『フロン』でいいわよ」

フロンティアことフロンが答える。

フロンは、核の科学研究所の科学者であった。宇宙学と遺伝学で博士号を取得している。なかでも、宇宙学は宇宙力学から宇宙航行学、宇宙生物学など、地学だけではなく生物や化学、幅広い知識が必要なため大変難しい学問であった。フロンは、史上4人目の宇宙学博士で、初の女性、更に史上最年少、『天才』と核の中でも有名な科学者であった。

「倒れてた！？」

思わずセイドは叫んだ。

「…………」
リラは、フロンに『シンシア』と呼ばれていた少女のいる観察室の隣、フロンの研究室である。観察室もフロンの部屋である。

こここの研究所の科学者には一人一つの研究室が与えられる。大きな最新鋭のコンピュータに、各自の学問に合わせた機械等、泊まり込んでの研究もできる様にキッキンまで備えられている。フロンの研究室の中は植物やソファが部屋の隅に置いてあり、研究室と言つてもただ堅苦しいだけの部屋ではなかつた。

部屋に入るとフロンがコーヒーを差し出す。部屋の真ん中にある大きめのテーブルを3人で囲み、フロンが『シンシア』と書つらしい少女のことを話し初める。

「ええ。 それも妙なのよ」

フロンは、沈痛な面持ちで語る。

「あのね、惨殺された数人の民間人の死体の真ん中で……、倒れてたの」

「え……、と言おうとして、セイドは言葉にならなかつた。

「うつわつ。なんつだそりや……」

リラは驚きながら言う。

が、セイドの耳には届かない。セイドはフロンの言葉に、15才の時に見掛けた『シンシア』を鮮明に思い出した。

（あ……、あの時と同じ……！？）

言葉で聞いただけではなんとも言えないが、セイドにはシンシアの発見された状態と昔見掛けた時のシンシアの状態が同じに思えてならなかつた。

「あ……、後ね」

続けて口を開いたフロンの声に、セイドは我に返つた。

「血まみれだつたらしいわ

（血……）

セイドは固まつた。固まつたまま、フロンの言葉だけは聞いていた。

「あ……、でもね。あの娘……、シンシア自体は無傷で、その血も周りで死んでいた民間人の……、血……」

（あの時と……、同じだ……。）

リラは啞然。セイドは呆然としている。

フロンの放つた言葉にセイドは確信した。

15才の時に見掛けた、何故か心惹かれた少女。なんだかとても妙な娘だった。そして、今。またもその『妙』な状態で発見された少女。惹かれると同時に謎も高まる。

（彼女は、一体なんなんだ？）

「その娘が殺したとかかあ？」

その時セイドの隣で、リラが割りと軽く言い放つ。その言葉に、セイドは一瞬目を見開き固まる。後、過敏に反応。

「それはないつ！ ないないつ、絶対ない！！」

思わずセイドは立ち上がり、頭からリラを怒鳴りつける。突然のことにより、リラはおろかフロンまで目を丸くしている。

惨殺死体の真ん中にいた無傷だが血まみれの少女。もしかしてこの少女が……、誰しも思うことである。

だがセイドは、何故だかリラの言葉を認めたくなかった。
そんなことはない、と強く思っていた。

「お前……」

しばし驚いた後、リラはボソッと呟つた。

「いつになくムキになるな」

「え……」

リラの言葉にセイドは驚く。思いもしなかつたが、言われてみれ

ばそうかもないと感じた。

「ハツハーン」

その時、リラは「ヤ～ツ」と笑い、うんうん、と何か納得した様にうなづいた。

「な……、何？」

「いや、やつと来たねえ」

「だから何が？」

ニヤけるリラに対し、訳のわからないセイド。リラはセイドの肩をポンポンと叩く。

「セイド君の遅い春が！――」

「はあ！？」

拳を掲げ力説するリラ。セイドは余りの突拍子のない話題の変化に怪訝な声を上げた。リラはそんなことおかまいなしに力説し続ける。

「お前と知り合つてはや2年！　俺は心配だつた訳よ。お前、どんなに可愛い娘見ても、綺麗な姉ちゃん見ても、ミニクロも興味示さねえんだもんつ。初恋は？　って聞いてもまだないつづり。もしやこいつはモーホー！？　みたいな」

「……つ

リラの冗談混じりの力説を聴き終えた時、セイドは声なき声をあげ、キレる。

「誰がホモだ――！」

セイドの怒りの拳がリラに炸裂。

「それに俺、あの娘のこと好きな訳じゃないよ…………」

セイドはかなり焦りながら言つ。

リラの言つ通り、セイドは19才にして初恋もまだなく、女性 자체にをして興味もなかつた。ゆえにこの手の話題になれていなかつた。

「何を言つて――」

リラはセイドの言葉に反論。セイドをビシッと指差し、またも力

説する。

「今まで女のおの字も知らなかつたヤツが、ここまで女の子に興味示してんだぞー。」

確かにセイドは、『あの娘』とシンシアに見とれた経験はあつた。が、それが何か特別なこととは、セイドはあまり考へていなかつた。

「だ……つ、だつて15才の時に1回田が合つただけだよー。」

ますます焦るセイドにリラは勝ち誇つた様に言う。

「だつたら、んなガキの頃に田が合つただけのヤツを、なんで今もなお覚えてんだよ。」

「……つ」

リラの鋭い指摘にセイドは言葉を詰まらせた。

（確かに、なんでこんなに印象深いんだろうとは思つたけど……、それはあの『妙』な状態ゆえじやないのか？）

考えを巡らせて黙り込んだセイドに、リラはなんだか勝ち誇つた笑みを浮かべ、はつきりと言つた。

「セイド。良く聞け。

『恋愛に時間は関係ない』、なんだぜ？

（時間は、関係ない……？）

その言葉は、セイドの中に響き渡つた。セイドの中の何かにコトヒトはめる。

ああ、やうか、と納得するセイド。

（俺は、あの娘のことが……？）

「……うわ、キザ！ いつもみんなこと言つて女の子口説いてんの！？」

「フツ。 まあな」

なんだか込み上げて来た恥ずかしさを隠し、ギャグに逃げたセイド。リラは得意気に返す。

『俺はあの娘が好きなのか？』、セイドは心の中で自問自答を繰り返す。だけど答えはわからない。経験がないゆえに、恥ずかしさが渦巻く。

「それはそつとフロンさん」

恥ずかしさから、話題を本題に戻すことにより逃げたセイド。リフは話題を反らすなと怒る。が、セイドは無視を決め込んだ。

「そんな所にいた理由とか……、彼女自身はなんて言つてるんですか？」

セイドが真剣に言つたのに對し、フロンは口ごもる。

「え……、いや。その……ねえ」

フロンは一瞬悩んだ様に言葉を切つたが、すぐ決心したかの様に口を開いた。

「実はあの娘……、地球語を話さないの」

「！？」

「じゃあ、地球人じやないんスか？」

即座に反応したのはリラ。セイドは口を丸くしたまま固まっている。

次々と現れる彼女の不思議。疑問は消えない。

(あの娘は一体、何者なんだ？)

「地球人かどうかは、まだちゃんと検査していないからわからないわ」
フロンの言葉にリラが何か思いついて、ニヤけた顔をする。そして「冗談混じりに言つた。リラのこんな時でも明るさを失わない性格は長所であり短所であろう。

「この宇宙戦争の敵星の刺客だつたりして」

「考えられなくもないわ」

「冗談混じりだつたリラに、フロンが真面目に、しかも即座に返す。「ヤけた顔のまま、え、と驚くリラ。セイドは一呼吸置いてから反応出来た。

「！？」

反応は出来ても声は出ない。そんなセイドの反応を見て、フロンは静かに説明を始める。

「実はあの娘……、シンシアがあそこにいるのはね、暴れてたからなのよ……」

「は？」

隣の部屋で大人しく座つている『シンシア』の印象からかなりかけ離れたフロンの言葉に、セイド、リラ共に目が点になつた。

『シンシア』は昨日、惨殺された人々の真ん中で倒れていたところを発見され、保護された。そしてそのまま戦災孤児として保護室へと送られた。

しかし、目が覚めたとたんに暴れだしたのだ。地球人にはわからない何処かの言葉を発しながら。

フロンの目には、その暴れるシンシアの姿は怒つていると言つくりも脅えて見えた。

「何がどこなのかわからない、お前達は誰なんだ。

言葉はわからないが、フロンはそう感じ取っていた。暴れている、と言つのも、無差別に傷付けるのではなく、我が身を守りつとしている様に見えていた。

因みに『シンシア』と言つ名前は、麻酔から覚めてからは打つて変わつて大人しくなつたシンシアに、フロンがダメ元で地球語で名前を聞き続け、やつと発した言葉であった。

地球語が通じてゐるのかはわからない。だから名前なのかどうかはわからないが、とりあえずフロンは名前を『シンシア』とした。

最初にセイドがシンシアの名前をフロンに聞いた際、フロンが言った『たぶん』はこのためだつた。

なんにせよ、暴れるシンシアの力は男3人でも押さえられない程強く、急遽麻酔銃を撃ち眠らせた上で、やつとここに運び込んだんだのだつた。

「はつきり言つてあの力は普通じゃないわ。普通の地球人……、とは思えないの。そういう意味で『敵星の刺客』つていうのも有り得なくはないのよ」

沈痛な面持ちでフロンは語る。セイドはおろか、リラも放心している。話す言葉も見付からず、フロンを眺めつゝも田が泳ぐ。

「後ねあの娘がここにいるのは」

フロンは更に沈痛に語る。瞳が厳しくなる。

「『シア保護反対派』がいるからなのよ」

「な、なんで！？」

セイドは思わず声をあげ、立ち上がる。思ひもよらぬ言葉に我が耳を疑う。

「なんたつてあの異常な程の怪力でしょ？ それに、あの田……。どう見ても正気じゃないわ

『言い難そうにも、はつせりとフロンは言つ。話を聞いていくうちにセイドの表情は雲つていく。フロンは説明を続ける。

「何より、倒れていた場所。血まみれの姿。　変よ……」

ヨリ一層声を秘そめるフロン。

『シンシア』は何処を見てるか分からぬ虚うな顔をしている。『正気じやない』と言われても文句の言えない瞳。更に、倒れていた場所も姿もおかしいのも納得でき、セイドは反論の言葉が見付からなかつた。

「そんなものだから、あのたくさんの惨殺死体はシアがやつたんだつて意見が強くて……。あの娘を切つて捨ててしまえみたいな意見すらあつて……。だから私が引き取つたの」

（じょ……）

『冗談じやない』と言おうとして、セイドは言葉にならなかつた。思わず隣の部屋で座り込むシンシアに手をやる。全身に力がこもる。フロンも、手に力を込める。

「確かに変よ？　妙、だとも思つわ。だけど、何の検査もせずにそんな決めつけるなんて……。」

黙黙よ……。させないわつ、切つて捨てるなんて……。」

このフロンの意見は少数派だった。不思議なシンシアのことでたちに、多くの者が不気味さを感じていた。

何か異質な者

ゆえにフロンの言葉に力が入る。氣を引き締めなければ負ける、と感じていた。

「フロンさん」

その時、シンシアを眺めたまま放心して固まっていたセイドがようやくと口を開いた。そして、決心したかの様にフロンを見る。

「俺も協力します！ 俺に出来ることがあつたら言って下せ……」

セイドはフロンの目を見て言った。真剣に、切実な想いで。

「冗談じゃない……っ。切つて捨てるなんて……っ」

（セイド……、会えたのに……）

そんな想いが、セイドの中に自然と込みあげてきた。

まだ会つて2回目。15才の時の1度目は会つたとは言へるのをすらわからぬ。そう考えるとまだ何も交流していない。だが、セイドの中で既にシンシアは、大半をしめるほど大きくなつたいた。

何故だかは、セイドにはまだわからない。

フロンは、セイドの切実な様子にかける言葉が見付からない。

「シアは、絶対俺が守るっ」

拳に力を込めてセイドははつせつと言つた。

「セイド君……」

フロンはセイドの真剣な思いを感じた。

そんな中リラは、同じくセイドの真剣な思いを感じはしたが、それを敢えて茶化す。

「ほー……。ねつれつーっ」

「ち、違……っ。べ、別に……っ」

「照れるな照れるなっ」

リラはシリアスな空氣に長時間耐えられないたちである。

「あーあ……」

一躍した後、セイドは大きな窓の向いのシンシアを眺めながら大きく溜め息をついた。

「『地球人じやない』……、かあ」

シンシアのいる観察室は、今セイド達のいる部屋にも大きな窓があり、ドアで繋がっている。

「セイド君……、まだそつと決まつた訳じや……」

フロンはボソッと言つ。が、セイドは一人考えを巡らせていて聞いていない。

「ねえ、フロンさん……」

セイドは窓越しに『シア』を見つめたまま神妙な顔をする。そして静かに口を開く。

「『シア』……、暴れてたつて言つけど、今は落ち着いてますね？」
観察室の中にいる『シア』は、虚ろな瞳で何処か1点を見ながら座っている。今の状態のシアを見ると、暴れていた、という事が信じられない。

「え？ ああ。そうね。麻酔から醒めてからは落ち着いてるわ」
フロンの言葉にセイドは、ある考えを思い付く。

(と同時に)とは、今なら近付いても大丈夫かも……？)

「フロンさん……」

思ひたつたら居ても立つてもいられず、セイドはフロンの口を見て口を開いた。

「俺に、シアと話をさせて貰えませんか？」

「ああ、それならドアの隣にインターホンあるから……」

「そうじゃなくて」

セイドはフロンの言葉を遮る。

もはやセイドには、窓越しもインターホン越しも、そんな物では我慢出来なかつた。

遮る物が邪魔。

「俺は面と向かつてシアと話したい。直にシアと会いたい」

「な……」

セイドの言葉にフロンは我が耳を疑つ。そして、思わず椅子から立ち上がり叫んだ。

「何を言うの！？ 駄目よつ、そんなの！」

「なんですか？」

慌てるフロンにセイドは静かに返す。止められる事は想像していたから。

「なんでつひ……」

不意にフロンの脳裏には、保護室で暴れた時のシアが鮮明に蘇つた。

普通の女の子とは思えぬ力で暴れたシア。大の男3人を相手に対等に、いや、むしろ上回る力で暴れたシア。

危ない

「また、また暴れるかもしれないじゃないつ

「そんなのやつてみなくちや分からないじゃないですか」

「やつてみて駄目だつたらどうするのよ！？」

「俺達兵士は、体術も一通りこなせるんです。大丈夫ですよ」

セイドの瞳は必死であった。

何を言つても聞かないセイドにフロンは軽く溜め息をつく。

暴れた時のシアを目のあたりにしているからこそ、『シアに近づく』ことは絶対にいけないとフロンは考えていた。

フロンは自分を落ち着かせ、説得の言葉を選ぶ。

「男3人でも敵わないのよ！？」駄目よつ

セイドはシアと直に会つてみたい一心で食い下がる。

「でも、もしかしたらつ、俺の……、覚えてくれてるかもしないし……」

思わず溢れたセイドの中にある淡い期待。心の中で、可能性は限りなく薄いけど、と思いながら。

セイドはうつ向き、15の時に見たシアを思い出す。拳に力がこもる。

「セイド君……」

セイドの悲痛な思いにフロンは返す言葉がなくなる。

「それはないんじゃね？」

セイド悲痛な思いを切り裂くかの様に、リラが口を挟んだ。少し、呆れ顔で。聞きたくなかった言葉にセイドは固まる。リラは呆れ顔のまま続ける。

「だつてよ、ガキの頃に1回、目が合つただけ、なんだ？」

「んなのあの娘にとっちゃなんでもないことだつて」

リラは『だけ』の部分を強調し、冗談混じりの嘲笑をうかべる。しばしの間、の直後。

「そんなこと言つなーつ！」

セイドの怒りの蹴りがリラに炸裂した。

「フロンさん。お願いします！」リラを撃退したセイドは、再びフロンに詰め寄る。

「絶対大丈夫ですか？」

その後ろで逆襲に燃えるリラ。

「貴様あつ」

「つわつ！？」

数分後、セイドの熱意に負けたフロンが、シアのいる観察室へのドアの前でたじろぐ。手にはフロンの身分証、と同時に核内での鍵である。フロン関連の部屋はこのフロンの身分証とフロンの指紋があれば開く様になつてゐる。

「ホントに……、行くのあ……？」

「はいっ！行きますよ～」

不安気に弱々しく聞くフロンに対し、セイドは「口一口といきません。『遂にシアと会える』、そう思つと自然に顔もほほりんだ。

「もうドア、開くんですか？」

「え？　いや……、この身分証通せば開くけど……」

と、フロンはそのカードキーを見せた。フロンは指紋を照合し、後は身分証を通すだけのところで決心がにぶつっていた。

その時、セイドの目の奥が光る。

「ん……？」

「わっ！」

セイドは持ち前の運動神経を生かし、早業でフロンから身分証を奪う。唖然とするフロンに、勝ち誇るセイド、更に呆れるリラ。セイドは自分の長身を生かし身分証を、フロンの届かない高さに持ち上げる。

「ちよ、ちよっとへつ。セイド君は空軍の若きホープなのがへつ！？　そんな子怪我させたら私、研究所から追放されちゃうよ～っ」

セイドは『取れるものなら取つてみろ』と言わんばかりに、カードキーを高く上げたまま、『二二二二二顔。聞く耳を持たないセイド、フロンは奥の手を出す。

「セイド君っ。もしセイド君がシアのとこ行つて怪我でもしたら、シア、今度こそ本当に切つて捨てられちゃうかもしれないわよー。」

「うー

フロンの奥の手な一言に、セイドは言葉を無くす。

（そうかあ……）

セイドはしゃがみ込む。頭を抱え、考えを巡らす。

（そうだよなあ……。余計なことして事態悪化させたら元も子もないもんなあ。

でも、せつかく会えたんだし話へりこ……。でももし悪化させちゃつたら……）

『でも、でも』と考えは堂々めぐり。グルグルと悩んだ後で、セイドの頭に一つの考えが浮かんだ。

（あ、そつか……。もし悪化させつけつたら、
守ればいいじゃん？）

ある意味安易。だが、最悪のことこヤイドは思えた。不本意ではあるがセイドは、戦闘能力は高く、更に『空軍兵士副隊長』と、権力もそれなりに持つていた。

守れる自信はあった。

「では、シアのとこ行つてきます」

不意に立ち上がるセイド。その顔は自信で満ちていた。

セイドの言葉にフロンは目を丸くする。

「なつー

ちょっとーつ、いい加減諦めてよーつ

「なつー

「大丈夫ですっ。俺が何がなんでも守りますー。」

「……っ！」

守れなかつたらビーするのよーー。」

リラは一人のやりとりを呆れて眺めていた。そもそも自分には関係ないと言ふ顔で。そんなリラが目についたフロンは助けを求める。

「ねえーっ、リラ君もなんか言つてー」

「……リラじゃねー」

「うーっ。ライアーンーっ」

「……」

フロンにすがられ、リラはため息をつく。そして仕方なく口を開いた。

「諦めたらー？」

「そうよーっ。ねっ？」

いまいちやる気の感じられないリラの言葉だがフロンは便乗し、セイドを説得にかかる。リラはそんなフロンの肩をトントンと叩く。

「違う違う。あんたが」

振り返ったフロンをリラは指差す。フロンはきょとんとする。

「どおして……っ」

ピッパー、プシュー

フロンの言葉を遮る様に機械音が響く。セイドはフロンがリラの方を見た隙に、シアのいる部屋へのドアを開いた。

「ちょーー！ セイドく……」

「はーっ。フロンさん」

セイドはフロンの身分証を投げ渡す。言葉なくフロンは慌てて受けとった。

そしてそのままセイドは、じゃ、と一緒に残しシアの部屋へと入つて行つた。

「ちゅうと……」

止めようとするフロンの肩をリラが押さえ。必死な顔のフロンだが、リラは笑う。ドアが閉まるとき同時にリラが口を開いた。

「大丈夫だと思うぜ？」

「え？」

「アッシュは、戦争嫌いだけど、戦いの天才だから」

セイドは、静かに座るシンシアの前にしゃがみ込んだ。窓の外ではリラは呑氣に、フロンは心配そうに中を除き込んでいた。シンシアは、ピクリとも反応を示さない。固まっているかの様に感じる程シンシアは動かない。

そんなシンシアに、多少の違和感を感じつつもセイドは、シンシアの顔を見つめた。

（なんか……、凄い美人）

まず思ったのはそれだった。

セイドには、特にシンシアの目が印象的であった。

何処を見てるか分からぬ虚ろな瞳、であるのは確かだが、赤く大きな瞳。綺麗な二重に長い睫毛。……何故赤いのか。普通なら疑問は残るが、セイドにはもはやどうでも良かつた。

後、セイドの目に残つたのは、シンシアの右耳にのみつけられた赤いピアスだった。

（なんか、シンシアの瞳の色みたい。でも、なんで右耳だけ？）

そんな風に、シンシアに心奪われつつぶとセイドは考えた。

(「」の娘と……、俺?)

セイドの頭に、自分とシアの並んだ姿が浮かんだ。が、一瞬で怪訝な瞳になる。

(なんか釣り合わない……)

と、次の瞬間に返った。

(……って、やつぱ、俺にとつてのあの娘……、恋愛対象なのか?)
答える出ない自分への疑問、次第にセイドの顔は赤く染め上がった。恋愛事に免疫のないセイド。なんだかよくわからないが、そのよくわからない事をグルグルと考え込み頭がパンクしそうになつていいく。

(まだ良くわからんつ。話したこともないのひとつ)

と、強引に自己解決をする。

セイドは心を落ち着かせる為に深呼吸をした。改めて、シアを見つめる。

シアの綺麗な赤い瞳。セイドは、吸い込まれそう、と感じた。長い髪、流れるような美しい髪。銀色なのだが、光の当たり具合によつては青味がかる不思議な色。細い華奢なからだ。透き通る様な白い肌。

田を、奪われる。

セイドは、手を握り締め、意を決してシアに話しかけた。

「あの……、シンシアさん?

4年前に俺のこと見たことあると呴つたですけど……、覚えてませんか?」

努めて一言やかに話しかけるセイド。だが、無反応なシンシア。

「……」

そんなシアの反応を何となく予感していたセイドは少しついつ向をため息を吐く。

（ま、そだよねえ。んな子どもの頃に一瞬田があつただけのヤツなんて……）

「ナニカコウカ」

（……え？）

不意に綺麗な女性の声が響いた。しかしセイドには通じない言葉、地球語ではなかつた。

セイドは田を見開きふと見上げると、ずつと少しひつ向いたままであつたシアが、顔を上げセイドの方を見ていた。

「！？」

声にならない声を上げるセイド。窓の外から様子を見ていたリラとフロンも田を見開いた。

（もしかして……、今の……。）

シアの声？

第壱話 白き少女 神秘（ハスキー）（後書き）

11月で読んで下さりありがとうございました。

長期連載になる予定です。よろしくおねがいします。

まだまだ初心者です。

よければアドバイス等、辛口な批評を頂けると嬉しいです。

第3話 露しき戦士 炎(フレイム)

セイドは田を見開いて固まつて立る。フロンやコウも同じく。
不意に響いた綺麗な女性の声。聞いたことのない、声。更に聞いたことのない、地球語ではない言葉……。

今の声はシアの声だよね？ セイドは心の中で問う。
だが、見知らぬ言葉に困惑し、固まつたセイドをシアは静かに眺めている。セイドもまた、静かにシアを見据える。

セイドとシアの田は今、合つて立る。

そのまま、何秒か過ぎた。深い沈黙、セイドもコウやフロンも口をつむぐ。言葉が見付からない。
皆、シアの第一声を待つ。

そんな中、今まで沈黙の中を微動だにしなかつたシアが、右手を静かにセイドに向かつて伸ばした。

困惑しているセイド。ゆっくり近付いてくるシアの右手にとつてに反応出来ずに田で違う。

シアの右手がセイドの左頬に触れた。

「痛つ」

瞬間、セイドの左頬に鋭い痛みが走る。
シアの手がセイドの頬を、

切つていた。

「…？」

突然の事にセイドは、リラやフロンも声が出ない。見るとセイドの左頬に、長さ4cm程の浅い切傷が出来ていた。浅くはあるが鋭い刃物でつけた様な綺麗な傷。

血が溢れ、頬を伝い、シアの右手の指先は血に染まっていた。

素手で人の皮を……？ 呆然と、だが割と冷静に心の中で呟いたセイド。事態を理解出来ずシアを見つめる。シアは相変わらず無表情のまま、視線をセイドに注いでいる。

リラとフロンは、部屋の外から、窓を通して一人を見ていた。セイド同様、突然の事態を理解出来ず、息を飲んだ。そして、セイドの流れる血を見て、我に返ったフロンがとっさに叫んだ。

「セ、セイド君……っ！ 危ないっ！ 逃げてっ！」

フロンの叫びはセイドに届いた。が、反応は出来なかつた。固まり、相変わらず事態を理解できず、額に汗が浮かぶ。

不意にシアは立ち上がつた。

立つてみると小柄なシア。セイドは座つたまま、やはり田だけでシアの行動を追う。何処を見てるか分からぬ虚ろな目で、そして無表情で、静かにセイドを見下ろしている。さつき、セイドの頬に傷をつけたとは思えないほど、険しさはどこにもなかつた。

セイドは思わず立ち上がり、シアと視線を合わせようとした。と

同時に、シアは田にも止まらぬ早さでセイドの目前まで移動した。

「わっ！？」

田にも止まらぬ耳や、と叫びつつも田に瞬間移動でもしたかの様に感じたセイドは田を見開く。

シアはまたもセイドこなはわからない、地球語ではない言葉で呟いた。

「ワタシニキガイラクワエルノカ……？」

「……え？」

セイドが聞き返した、瞬間。

シユツ、と、風を切る音。

「……？」

シアがセイドに向けて、再び田にも止まらぬ耳の回し蹴りをくり出した。セイドはすんどのどりでしゃがみ、なんとか避けた。

「セイドー。」

「セイド君ー。」

フロンとコラが口々に叫ぶ。しかし、セイドには聞こえていなかつた。

田の前にいるシア。そのシアがしたこと。我が身に起つたこと。セイドは突然過ぎて理解できない。グルグル思考が渦巻く中、思つた。

「の娘、何者……？」

「……？」

その時、不意に田前へ伸びたシアの手で、セイドは我に返った。

シアは、セイドの胸元を掴み、セイドを引っ張り上げる様に立ち上がりさせた。

フロンとリラが悲痛に叫ぶ。

意味が分からなく、呆然とシアを見つめるセイド。額にはうつすらと脂汗がうぐ。意味はわからないが、何か危ない、と感じる。シアは一瞬セイドの顔を見つめた。その後、掴んでいたセイドの胸元を自分の方へ引っ張り、そのまま、右膝にてセイドのみずちへ膝蹴りを入れた。

鈍い音が響き、セイドは息が詰まる。その場に崩れ落ちた。コラとフロンがどうぞセイドの面前を叫ぶ。

凄い力……。セイドが今まで経験したことがない程の衝撃であった。

みずおちに食らった激しい衝撃に、息の吸えないセイド。酸素を求め、肩を揺らし激しく息を吸おうとする。シアは静かに倒れたセイドを見下ろしている。

息が少し回復するとセイドはなんとか立ち上がった。そして、困惑の眼差しをシアに向けた。

シアはセイドの顔を眺めた。そして気付いた。何度攻撃をしても、セイドからは殺氣はおろか、反撃の気持ちも感じられないこと。

「オマハ……」

シアが呟く。もちろん、セイド達には通じない、地球語ではない言葉で。

「ワタシノテキジャナインダナ？」

セイド田を丸くした。もちろんシアの発した言葉の意味は全く分からぬ。が、今のシアの言葉は自分に話しかけたものだと分かった。

敵意を感じないセイドにシアはクルッと、後ろを向き、もといた場所へ戻ろうとする。とつせにセイドは止めた。

「ちよ、ちよと待つ……」

思わずシアの腕を掴んだセイド。シアはゆっくり振り返り、静かな田で見返す。なんだかセイドはその瞳にドキッとした。

「ノノ、ノメタハ」

思わずシアの腕を離したセイドに、シアは静かに口を開く。

「ナニカコウカ？」

もちろん地球語ではない。セイドの田は言となる。

一体何処の言葉……？ シアは間違いなく自分に話しかけている、セイドにはそれはわかる。が、シアの放つ言葉は、全く聞いたことがない。

困惑し考えを巡らせていくうちに、セイドが答えを返さないためシアは再びセイドに背を向ける。今度は、思わず呼び止めた。

「シアッ」

その声に反応したシア。ゆっくりと振り返った。

セイドの心臓が高鳴る。

振り返ったシアの仕草が、姿が、セイドにほどても美しく、魅力的に写った。更に、自分の呼び掛けに答えてくれた、といふことがまたセイドには嬉しかった。

『シア』と言ひながら前に振り返った、つまりは前はシアで間違いないのか。

速くなる動悸。と戦いながらセイドは、必死にシアへと語りかけた。伝わるかはわからない、地球語で。

「ねえ。君は地球語はわからないの？」

「……ハ？」

シアは反応を示すがやはり地球語ではない。何を言っているのかはわからないが、なにかこっちの言葉が丸つきり伝わってないって感じはしない、セイドはそう感じていた。

「……ねえ、シア」

セイドは自然と熱くなる。言葉に力がこもる。せっかく余えたシアへの切実な想い、セイド自身も正体のわからない強い想いから。

「もし地球語が分かるなら、地球語を話してくれないかな……？」

真剣に熱く語るセイド。シアは静かな瞳を向ける。

「じゃないと、俺には伝わらない……っ！」

セイドの言葉に、シアは少し目を大きくさせた。そして、軽くつなぐ。

間を置いてからボソッと口を開いた。

「ああ、そうか……」

シアの口から溢れたのは、聞き慣れた地球語。

「ここは、地球……なのか？」

シアがさらっと放った言葉。セイドは、リラにフロンも、言葉をなくした。目を丸くするセイド達に首を傾げるシア。少しの間の後、セイドが呆然と呟いた。

「しゃ、喋った……」

ピッピッピッピッ……

響く機械音。巨大なコンピューターと宙に浮かぶ何枚もの巨大な画面に向かう白衣に身を包む人々。慌ただしく行き交う人々の声。

地球上に攻撃を仕掛けて来た地球の敵星・惑星『トウーム』の最高研究室。トウーム政府のお抱え研究室で、トウーム最高峰の研究者達が集まる。表から裏までを扱う、極秘の研究室である。

「ルイン博士っ」

騒がしい研究室に、1人の男性の声が響いた。ルインと呼ばれた男が振り返る。

ルインこと、『ルイン=チャンフィス』は33才にしてトゥーム最高の科学者であった。黒髪に黒い瞳、見上げる程の高い身長。表情にあまり動きはない男。だが、瞳の奥には何か黒いものが宿る。

「いました！ シンシアです！」

「何？」

男性は何枚もある画面の中でも一際大きな画面を指差す。そこには、シアの姿が、シアの今現在の姿が写し出されていた。

「ビビだこには」

「画面にいるシアを見て、ルインが言つ。

「R・E（地球協和国）の核です！」
「核……」

ルインの顔が少し険しくなる。そして腕を組み、軽くため息をついた。

「と言つことは、捕まつた……、だな
「……ですね」

ルインの隣で男性は相づちを打つ。ルインは画面上のシアをまじまじと見た。隅から隅まで観察するかの様に。

「やはり左耳のピアスが外れているな
「なんの拍子に外れたんでしょうね」

「さあな」

ルインは腕を組み直したため息をついた。眉間に深いしわを刻む。シアを見つけた男がボソッと言つた。

「面倒なことになりましたね」

「全くだ。あのピアスを神経に繋いで操つて、地球人殺しをしていたというのに……」

「おまけに、ピアスがついている間の記憶はないですね」

「あつてもやつかいだらう。このことペラペラ話されたらかなわん」

「……そうですね……」

ルインは再び大きなため息をつく。

『シアが見付かった』という情報に、その研究室にいた人々がざわめき、集まって来る。

ルインは少し考え込んだ。が、直ぐに決断した。

「シアは直ぐに私が回収に向かおう」

ルインの言葉に、一同が驚く。ざわめきのなか男が口を開いた。

「えつ、直々にですか？」

「シアは私にしか手に負えんだろう」

「そ、それもそうですね」

ルインは、画面上のシアを眺め、口元だけでニヤッと薄く笑う。そして、得意気に、力強く言つた。

「シンシアは我々の最高傑作だ。地球人には決して『返す』まいっ」

その言葉に研究室の皆も同意し、歓声が起る。そんな中、ルイ
ンは宣言した。

「直ぐに地球へ向かう。準備しろ。」
「はう！」

シアが地球語を話せることが判明しフロンは、ひとまずシアを観察室から出していった。それから再び研究室のテーブルを囲み、シアに詳しく話を聞くこととした。

「やうか、ここは地球なのか……」

シアは辺りを見回しつつボソッと言った。それはまるで、初めて見た、と、言わんばかりであった。

「シ、シア？」

セイドは、シアの地球を知らないやうな態度に困惑しながらも聞いた。

「君は……、地球人じゃないの？」
「いや。地球人だ」
「!？」

シアはさりげと答える。が、3人は驚く。シアが最初に発した他星の言葉、それが心に色濃く印象に残り、まるで説得力を感じない。

「じゃ、じゃあ、わつきの言葉は！？」

「地球語ではない。何処の言葉かは私も良くは分からぬ」

シアは相変わらずあつたりと答える。が、セイドら3人は目を丸くしつばなしだる。自分の話した言語なのに、どこの言葉かわからぬ、そんな事があるのでうか。少し間を開けてから、セイドがやつと反応した。

「な、何それ！？ ビーゆーこと……つ！？」

あまりの不可解なシアの発言にセイドは壊れた。その後、セイドはリラとフロンになだめられる。

「私の名はシンシアだ。苗字は知らない……、といつか聞かされていない」

「う

改めてシアが語った衝撃的な言葉に、セイド達は言葉を失う。が、シアは表情一つ変えずに淡々と話す。

「後、私にはここに来る前は、13才の時の記憶しかない」

「！？」

せりりと話すシアのとつもない発言。セイド達は驚き目を丸く

した後、同時に反応した。

「なんでつー?」

「知らない。」

「気付いたら13才だった。その時は、どこかの星かは分からないが、地球ではないところ……、さつきの言葉の星にいた」

やはりシアはあつさつと答える。

なんだそれ。

と言おうとして、セイドは言葉にならない。目を丸くし、言葉も見付からないまま、シアを見つめる。だがある意味納得。だから自分が話していた言語もわからないのかと。

シアは、自分に起こる不可解な事態に首を傾げるでもない。そんなシアの態度に、セイドは少しの疑問を感じた。

そんな中、例に漏れず呆然としていたリラがボソッと聞いた。

「今は、何才だかわからんのか……?」

「ああ。……今は宇宙暦何年だ?」

「3782年」

「なら、私は今18才だ」

「俺らより1才下か……」

「あれから5年も経ってるのか……」

シアはブツブツ言いながら、少し考え込んだ。

「駄目だ……。何も覚えていない」

シアは少しつつ向きはするが、やはり無表情である。故に、考えた末に思い出せないのだろうが、いまいち説得力がない。

セイドはシアを見つめたまま固まっている。シアの身の上に起こつてゐる不可解な事態。そして、その不可解さを感じさせないシアのあつさりした態度に、混乱していた。

シアは何故こんなにも落ち着いているのか。普通記憶がなくなつたら、人はパニックに陥るのではないか。様々な疑問がセイドの中を行き交う。

今になつて冷静に思い返すと、出合いからシアは不可解であつた。当時のセイド、その不可解さは気にならなかつたが。

「ねえ、シア……」

セイドは静かに話しかけた。意を決して、初めて見た時のことを見くために。

「あ、あのさつ、4年位前なんだけど……つ、君、俺と会つたことあるはずなんだけど……、

覚えてない？」

「4年前……？」

セイドは最後の一言を一瞬を開けてから言った。『覚えてない』と言われるのが怖くて。

シアには4年前、つまりは14才の時の記憶はない。セイドが見掛けた時のシアの記憶が。

「いや……、4年前の記憶はないから……」

シアの言葉につなだれるセイド。

シアは記憶がないものだからそつ答えたはいいが、何かひつかか
つた。セイドの顔をじっと見る。

14の時の記憶はシアはない。だから4年前など覚えている訳
がない。なのだが、何故か……。

シアは何か、セイドに見覚えがある気がした。

「シア？」

「！」

シアの視線に気付いたセイドが呟つ。シアはハッと我に返った。

「どうした？」

「いや……、別に

どうかしている、シアはそう思つた。記憶がないのに見覚えもない。きっと氣のせいだと、シアはその妙な感覚を強引に心の奥にしまい込んだ。

「それよつお前たちの名前？」

セイド達は、シアとこうあまりにも衝撃的な存在に、自分達のことは名前すら教えていなかつた。

その時はもう夜だったため、名前を紹介し終えるとそのまま解散した。

時計の針はははもう、夜の2時を回っていた。セイドは向やうら眠りにつけず、ベッドの上で寝返りを繰り返していた。ベッドに入つてから既に2時間が経過している。

「セイド」

その時、リラが2段ベッドの上の段から降りて来た。軽く1・5mはある高さを簡単に飛び降りる感じで。

「アロアロアルセ」

「あ……、ひめん」

「眠れないのか？」

リラは軽くため息をついた。セイドはゆづくりと起き上がりつつ向いた。眠れない原因はセイドも自分でわかっている。リラにしても、感付いてはいた。

セイドの頭の中で渦巻いて、睡眠を邪魔していたものは、シア。

不思議なシア。

「ねえ、シアって、シンシアって何……？」
「は……？」

セイドの質問に、リラはすつとんきょううな声を上げる。感付いてはいたが、シアそのものを『何?』と来るとは思つていなかつた。

「コラはさ、見てただけだから良く分かんなかつたかもしないけど……、あの娘の動か……、普通じゃない」

セイドはうつ向じたまま語る。酷く沈んだ声で。

自分の発した言葉に、シアがセイドに向かつて来た時のこと�이思は出される。素手で人の皮を切り、空軍1の強さであるセイドにも勝るスピード・力・戦闘技術。凄い勢いで向かつて来る割に無表情な顔。更に話していた言葉、不可解な身の上、その不可解なはずの状態にあまり疑問すら感じていなせやうなシアの態度。

全く訳が分からぬ。

「まあまあ。空軍1の強さのお前がみぞおち食いつたつしてたもなあ」

コラはセイドの言葉につなげく。コラは、セイドの強さは身に染みてわかっていた。

「だつてさ、シアは女の子だよ? ……」

ホントに地球人?

セイドはそつぱおうとして、その言葉を飲み込んだ。認めたくなかつたからだ。セイドの拳に自然と力が入つた。考えれば考える程、深まりそうな謎に。

セイドのうつ向き、苦悶する姿に、リラは軽くため息をついた。セイドが思考の渦から抜けなくなつてこることがなんとなくわかつた。そして呆れ顔で言った。

「関係ないんじゃない？」

その言葉にて、セイドの思考・行動供に止まった。

数秒後、やつと反応できたセイドは、やつへつとコラの方を見た。

「…………え？」

セイドの呆然とした疑問の眼差しにて、コラはあつせつキッパリと離つ。

「だつて……、シアはシアだろ？」

セイドは皿を見開いた。

驚きで、セイドにはそんなこと思つてもしなかった。

『シアはシア』

セイドの中でその言葉が大きく広がる。渦巻いていた疑問不安が、あっけなくぐらりと簡単に晴れていった。

「やつか……」

セイドの口から思わず言葉が漏れた。先程の様な沈んだ声ではない。

「やつだよねえ……」

セイドの声に明るみが戻る。セイドの言葉にコラが大きくな付く。

「セイド、」

「ど、この誰だろ、と関係ない……。シアはシアだもんねえ！」

セイドは憤々として言つ。そんなセイドに、リラは再び呆れ顔。

「しつかし……、ホンシト熱烈だな」

「へ……？」

リラの素直な意見。セイドは固まつた。

数秒後。

「んな、つーちつーつ、違つー！」

「ほー。違つ？」

慌てて否定するセイドに、リラは「ヤーッ」と笑つ。リラはズイつとセイドの方へ身をのり出した。

「じゃあ、俺がねらつていい？」

数秒の間。

「ええ、ー？」

セイドは目を見開いて叫ぶ。思いもよらぬ、だが少し考えればある意味当然、リラは女好きであるのだから。一ヤつとしながらリラは言つ。

「だあーってあの娘、ズッゲー美人だしつ、惚げでいいカンジッ！」

「んな見た目だけで……つ」

「俺様はメンクイだ」

「 」

コラの言い分に、反撃の言葉も無くしたセイドは固まつた。冷や汗を垂らしながら。リラは、そんなセイドに勝ち誇つた笑顔で追い討ちをかけた。

「 なあ、ねらつてこい？」

「 だ、駄目っ！」

だめだめだめだめっ、絶対駄目っ……」

思わずセイドは叫んでいた。息が荒れる程に。リラの『女好き』を田の当たりにしているセイド、そんなリラにシアが好かれてしまつては口クなことがない、と考える。

それに対しリラは再び呆れ顔。ボソッとセイドに告げる。

「ほらな。熱烈じやん」

「んな……っ」

セイドも再び赤くなつ固まる。反論のため声をあげる。

「ち……っ」

「『違つ』とは言えねーよなあ？ もつ。」

思わず叫んだセイドの声を遮り、コラは「やーっとしながら」と叫んだ。固まつ、黙り込むセイドに『ねらつひやつひー』などと追いつをかけながら。

セイドの思考は渦を巻いた。

今まで人を好きになつたことのないセイド。だから、セイドにとつてのシアがなんのかよく分からなかつた。気になることはわかつていたが。ただリラが……、他の人がシアをねらうのは我慢ならなかつた。

「ねえ……」

一頻り悩んだ後、セイドはリラに恐る恐る聞いた。ことの真意を。

「……本気……？」

リラは驚いた。「こんなに真面目に返されると困つていなかつたのだ。が、すぐまた一ヤけた。

「ああっ」

「ええっ」

茶化しただけのリラに、セイドの本気につぶつたえた反応。リラは驚き半分、呆れ半分でセイドを見た。神妙な顔でリラを見るセイド。

「ふつ」

リラは我慢ならず思わず吹き出した。セイドが疑問の声をあげたと同時にリラは、お腹を抱え大声で笑い出した。

「ギヤハハハハツ！－ マジだコイツ……ツ、マジになつてゐ－」
「な……つ」

リラの笑い声が高らかに響き渡る。本気で笑いころげるリラに、セイドは真っ赤になつて怒る。からかわれていただけだとやつと気付いた。

「コラシー。」

「いやー、わりいわりい」

リラは笑いをこらえつつ言う。セイドはなんだか悔しい。『コラ』といつ人となりをわかつていたはずなのに騙されていた事に。

「大丈夫だつて。冗談に決まつてんだろ。この俺様、人の好きな女に手を出す程、飢えぢやいないんだよ」

リラが得意気に話す。セイドは尚疑問の……、疑惑の目を向ける。騙されていた事はわかるが、リラの『女好き』の面を考えると信用出来ず。

「本当?」

「ああ」

本氣で茶化していただけのコラはまつきつと答える。セイドには、未だにイマイチ信用出来ない。

「本当!?」

「おひ、おひ」

いきなりセイドは凄い剣幕となる。リラは軽く気押される。その後セイドが納得するまで質問が続いた。

「嫌でやつ」

次の日。空軍兵士の訓練場にセイドの声が響いた。

「今日出るのはー叩機じやないでしょーつー？ 僕は1号機専属パイロットですよー！？ なんで俺が操縦しなきゃなんないんすかー！？」

「」の訓練場では、もはや珍しくもない言い争い。相手は、空軍兵士隊長である。

コラは呆れ顔で相変わらずの2人のやりとりを眺めている。

「お前のが腕がいいからだつ」

「んなの関係ないつす！ なんのために各艦専属パイロットがいると思つてんすか！？」

崩れた敬語のセイド。

セイドにとつては、嫌々参加してこる戦争。出来る限り手は染めたくないと言えている。一方隊長は、空軍兵士きつての天才セイドに、軍艦の操縦をさせたくて仕方がない。 それも、敵星はあまりに強く、今のところ完全に立ちあがめるのはセイドだけであった。

地球の文明ではまだ、敵星の名前すら分からぬ。 それほどままで、敵星の文明は進んでいた。

「クビにすらやつ」

「どーぞ、『』勝手につけー！」

思わず黙ってしまった隊長。それがあつたが返すセイド。隊長は言葉に詰まる。『クビにすんな』と言こはしたが、実際問題、セイドにやめられては困る。

「なんなら俺から辞めてあげますよ」

「ま、待てっ！」

クルツと隊長に背を向けたセイド。慌てる隊長。

「まあまあ」

そんな2人のやつとつこ、呆れ笑いを浮かべながら声をかける男の声が響く。声に気が付いたリラが一早く声をあげた。

「ケント……、ココ」

そこに、白衣に身を包んだケントと呼ばれた男性とココと呼ばれた女性が腕を組んで立っていた。

「隊長さう。少し落ち着いたらどうですか？」

ケントが二口やかに言つ。隊長は冷や汗を吊り、ケントを見る。そして静かに口を開いた。

「ドクター・ラーセイ。……何か？」

『ドクター・ラーセイ』ことケント・ラーセイは空軍医主任であった。28才の若さで主任となつた凄腕医師である。空軍艦1号機専属空軍医であり、セイドやココと中が良かつた。一緒に現れたユ

リ」とゴーリス＝ラーセイは、ケントの妻であり、空軍に属する看護師主任である。莉莉も26才の若さで主任となっていた。

2人とも笑顔を絶やさず、マイペースでのんびりしている。対する隊長41才。隊長といえども、それは平の兵士の隊長であり、その上には将校達が連なっている。兵士と軍医、立場は違えど位の高さはラーセイ夫婦の方が高かつた。隊長は、この2人が苦手であった。

「今セイドに辞められては困るでしょう。それに万一それでセイドが怪我したりどうします?」

「――」ながら言つケントはココも続く。莉莉もやはり、終始――

「モーですよー。セイド君じゃなきや、1号機は誰も操縦できないんですよー? それこそ困るじゃないですかー?」

「――」満面の笑顔で言つケントとココに、隊長は軽く呆れるが、確かな所をつかれ何も言ひ返せない。

「それも……、やうだが……」「だつたら、それくらいにしたらビードですか?」

すかさずコリが「――」しながら言つ。隊長は何も言えず、『フンッ』と鼻息を荒くして背を向ける。

そんな隊長を見て、ケントとコリは顔を見合わせニッと笑う。

「あ。ラーセイ夫妻?」

隊長が思い出したかの様に振り返る。

「軍内で腕を組んで歩くのは辞めてトセーフ」

「はーー」

ケントとコリは軍内でも有名なオシドリ夫婦である。

「ハハ。出た……。ラーセイ夫妻による「一二二」攻撃」

リラは少し呆れつつ言つた。コリが笑つて答える。

「アハハハ。何それ」

「ケント、コリ……。ありがと、助かった……」

「いえいえ。後でなんかおじつてね」

セイドは深いため息と供に言つた。ケントは「冗談混じりに言つた。いつも「一二二」しているケントは、何処までが本気でどこからが冗談なのか、セイドにはある意味わからなかつた。ある意味、ポーカーフェイスなケントである。

「あつ、そうだ。セイドッ」

その時ケントが思い出したかの様に言つた。

「あの美つ人な戦災孤児の娘に恋をしたんだつて?」

セイドは言葉なく目を見開く。リラも驚く。思いも寄らぬ、急なケントの言葉に。

「んな……つ」

「なんで知つてんの？」

顔を赤く染め、思わず反論するセイドを遮り、リラがあつさりと肯定する。

「リ……つ」

「あのねえ」

慌ててリラに反論しようとしたセイドを、今度はコリが遮った。

「私達とフロンはねえ、同じ大学なの」

「!?

コリの突然の思いもよらぬ言葉にセイドとリラは目を丸くした。

フロン、ケント、コリの3人は、地球最高のレベルである核大学^{コア}をスキップで入学し、卒業していた。フロンは16才で、ケント&コリは18才で卒業、そのまま核に就職し、今に至っている。

コア大学を卒業し、核内で就職する。これは、それぞれの分野の中でも、選りすぐりのエリートにしか通れない道であった。

「アハハ。びっくりした? 特にねえ、私とフロンは11才から友だちなの~つ」

「ハハハしながら、かなり幼い喋り方のコリが言つ。

コリにしてもケントにしても凄くおつとりしていて、顔もかなりの童顔であった。更に喋り方も、特にコリの喋り方は幼く、セイドとリラには、あれだけしっかりした大人の女性であるフロンとケン

ト&gt;・ユリが友だちといつのが変な感じがしていた。

その時、不意にかん高い機械音が響いた。私の携帯だ、と、ユリが慌てて自分の携帯電話を取り出す。携帯電話を開いた途端、外にも漏れる程の女性の声が響いた。

「コリッ」

「わっ」

声の主は、もはやセイドとコラも聞き慣れたフロンであった。フロンはかなり慌てた様子でユリに向づぶ。

「フロンー？ どしたの？」

「ねえっ、コリッ。セイド君っ、セイド君知らない？」

「え？ セイド君ならここに……」

「代わつて！」

凄い勢いのフロンに、ユリは首を傾げながらセイドに電話を代わつた。

「フロンさん？」

「セイド君っ！… 探してたのよーっ！」

凄い勢いのフロンにユリに同じくセイドも首を傾げる。それからフロンは一度ため息を付いて落ち着いてから、かなり神妙な声で言つ。

「いい？ セイド君。落ち着いて聞いて？」

急にトーンの変わったフロンの声に、セイドもつられて神妙な面持ちになる。

「は、はい……」

それからフロンは、もう一度深いため息を付いた。息を飲み、手に力を込める。そして、意を決したかの様に口を開いた。

「シアガ……っ」

「シアガ？」

「シアガ、

消えた……っ

第3話 麗しき戦士 炎 フレイム

終了

第三話 露しき戦士 炎(フレイム) (後編)

いいもで読んでトセり ありがとウイークもか
わしがれば感想などを頂けると嬉しいです

第参話 消えた華 謎（リドル）（前書き）

待つていて下さる方がいるのであれば

お待たせ致しました

シンシア 第参話です

毎度毎度 お待たせして申し訳ありません

第参話 消えた華 謎（リドル）

『シアが、消えた……っ』

核内に行き交う人の群れの中、セイドの激しい足音が響く。多くの人々の中を縫う様に、多少誰かとぶつかりながらも気にも止まらず走り抜ける。

フロンの言葉がセイドの頭の中でグルグル回っていた。

『今朝、あの部屋に行つたらもぬけの空で……』

シア……ッ。

壊れたレコードの様にリピートしているフロンの言葉を振り切る様に、心の中でシアの名を呼ぶ。無意識に、何度も、何度も。

『シア保護反対派のこともあるし、心配で……』

まさか、シア保護反対派が……？

次々と押し寄せる不安、悪い予感。それを振り切るかの様に一心不乱に核を走り続けるセイド。シアの無事を祈り、悪い予感と戦い、ひたすらフロンの研究室を手指して床を蹴る。

シア……っ！！

「フロンさん……っ」

フロンの研究室に、セイドの荒れた息の悲痛な叫びが響く。フロンは弾かれた様に立ち上がり、セイドに駆け寄った。

「セイド君……っ」

「フロンさんっ、シアが、シアが消えたって、ビックリ……っ」

「あーっ、もーっ、セイドッ！」

整わぬ息のまま、悲痛な声と顔でフロンに詰め寄るセイドの声を遮り、やはり整わぬ息の声が響いた。セイドの後ろより後を追っていたリラである。

「走るのはえーよ。こつもよつ。……？」

無我夢中で走っていたセイド、ただでさえ早い足がいつも以上に速く走っていたらしい。リラはそんなセイドに不満をもらした直後、部屋の奥にいた見知らぬ2人に気付いた。

「……誰？」

「ホントだ……」

セイドは、リラの言葉で初めてその2人に気付いた。そこに立つのは白衣を来た男女。セイド達よりも若干若そうな少年と、フロンよりも少し年上の様に女性。

シアの事で頭がいっぱい、今のセイドに回りを見る余裕はない。リラの言葉に、フロンが微かな苦笑いを浮かべる。

「この2人は、シアのことでの数少ない仲間よ……」

核の研究所内、とある一室。研究台の様な、実験台の様な、^{コア}機械的なベッドの上にシアは眠っていた。

「ん……」

自然に目が覚めたシアはゆっくりと起き上がった。眠氣眼のぼやけた視界から、少しづつはつきりとした輪郭を帯びた世界へと戻つていく。……そして。

「え……」

シアは、我が目を疑つた。

呆然としたまま辺りを見回す。昨日シアは、あの無機質な觀察室、ではなく、その隣のフロンの研究室のソファで眠つた。……はずだつた。が、目覚めてみると全く見覚えのない部屋に寝かされていた。表情の洟^{ハラ}しきシアだが、さすがにその目には驚きの色が広がつている。

「（）」は……？」

「お田覚めか？」

呆然と呟いたシアの後ろから、とても低く太く響く男性の声がした。シアは、シアの意思とは関係せず、体だけがその声に、ビクンと反応した。

「」の、声は……。

聞き覚えのある声に、シアはソロリと振り返る。ゆっくりと視界が入ってくるその男。そしてそのまま、目を見開いて固まつた。

そこにいたのは、惑星トゥームの天才科学者・ルイン＝チャンフイスであった。

「久しぶりだな。シア」

口元だけで薄く笑つたルインは言つ。シアは、目を見開いたまま呟く様に言つた。

「お前、は、13才の時に……、側に、いた……？」
「覚えていたか」

ルインはシアに歩みより、右手でそつとシアの顔に触れ、顎をしゃくり上げた。

「覚えているも何も、13の時の記憶しかないだ」
「そうか」

呆然とする中、ただ言われるがまま答えていたシアに対し、ルインはニヤツと笑つている。

シアは、ルインのその笑つた瞳が、なんだか嫌だ、と感じた。

笑つているけど笑つてない。目の奥が冷たい、目の奥に何か濁つたものがある、そんな印象を受けた。

「お前、誰だ？」

呆然としていた瞳を強張らせ、シアは思わず口を開いていた。

「覚えていたんじゃないのか？」

相変わらずの目が笑っていない笑顔で、ルインは平然と答える。そのニヤリと笑う口元が、シアを少しイラつかせ、珍しく声をあげた。

「違う。そうじゃない。

お前……、私が13の時だって、ずっと私の側にはいたが、私はお前の名前一つ聞いてない」

シアの訴えに、ルインは表情を崩さない。シアの顎を持ち上げた右手もそのまま、真剣なシアを嘲笑うかの様に、ニヤリと笑う口元。

「だいたい、お前何故地球にいる？ 13の時にいたのは地球じゃなかつたはずじゃないか？ なのに何故、お前も地球にいるんだ……っ？」

シアがわめいても、問いつめても、ルインは表情一つ変えず、言葉一つ発しない。シアはその口元だけでニヤリと笑うそのルインに、何か不気味さを感じた。

「貴様、何をうそり笑っている……」

シアは言葉の途中で、遮られた。そして、凍り付く。我が身に起つたことが、理解出来ない。

シアは、ルインに、そつと口付けをされていた。

ルインの瞳から得た、不気味さや冷たさからは想像出来ない、優しい口付け。

シアは頭が真っ白になっていた。反応が出来ない。

な……？

思考回路すらともに働かない。田を見開き、田の前過ぎでぼやけるルインの顔を眺めていた。

長めの、優しい口付けの後に、ルインは静かに口付けをやめた。ゆっくりと顔を離し、先ほどとは違う静かに瞳で、シアを見つめた。そしてそのまま、優しく抱き締めた。

優しいルインの腕に包まれているシア。時間と共に、シアの頭がはつきりとしてくる。思考回路が活動を始める。我が身に起こったことを理解し始める。

何を……つ？

「は、放せ……つ」

不意に、鈍い音が響く。

無意識に動いたシアの右手は、思わずルインの左頬をひつかいていた。

ルインの頬に、二筋の赤い線が浮かび上がり、そこから暖かな赤い液体が溢れる。シアの指に、滴る血。

我が身に起つたことは理解したが、何故こんなことになつたのがシアには全く理解出来ない。

「何の、真似だ……？」

流れ落ちる血を手で拭いながらルインは言った。優しさは消え、当初の冷たい瞳に戻り、静かにシアを見据える。

「それはこいつのセリフだらう。」

思わず声を荒げたシアを、ルインは見下ろす。冷たい瞳に、怪訝な色を追加して。

「お前、何故だ？」
「は……？」

突然の問掛け。主語のない問い合わせに、シアには何のことがわからぬ。

「お前に中に『感情』といつものが目覚めてきてるらしいな

軽い溜め息と共に、さうと聞いたルインの言葉。シアは目を丸くする。

「感、情……？」
「まあ、気にするな」

ルインは、『シアには関係ない』とでも言つたげに、シアの言葉を軽くあしらつ。

「貴様……っ」

「それよりも」

ルインの言葉に流石に神経を逆撫でされたシアが声を荒げる。が、ルインはそんなことはものともせず、話を続ける。

シアの言葉は、丸きり聞き入れる気がないかの様だ。

「何故ここが地球だと知っている?」

「え……」

ルインの問いかけに、シアは呆然とする。ルインの態度に、まるでシアを小馬鹿にした様な態度に腹は立つが、何故か逆らう気がおきない。何故か、素直に答えてしまう。

「き、聞いたから……」

「聞いた? 誰に」

「じつちで知り合つた人に……」

シアの言葉にルインは少し目を丸くする。それから、馬鹿にでもするかの様に鼻で笑つた。

「もう知り合つがいるのか」

「……っ」

馬鹿にした態度。

シアは再び苛立ちを覚える。と同時に、何かルインには逆らえない感覚を得る。

ルインに、見られると、話しかけられると、なんだか畏縮してし

まう自分に気が付いた。

なんだ？ と、自分にも問ひ様に、シアは静かに口を開いた。

「貴様、一体私のなんだ？」

ストレートな疑問。ルインはその問いに一瞬考えた。後に、思いもよらぬことを言ったのだった。

「そうだな。強いて言つなり……、

父親つてところか？」

衝撃的な言葉。

シアは、この言葉を聞いてから、反応するまでに、数秒を要した。

「キャリオ＝シェイリーさん……、と、チエスター＝レンさん？」

セイドの言葉に、フロン曰く、『シアのことでの数少ない仲間』である2人をお辞儀をする。

『キャリオ＝シェイリー』は、32才の女性。遺伝学博士。遺伝学ではフロンの先輩に当たる。

少し癖のある黒い髪を一つに束ね、ジーンズ系の動き易い服装を好む、快活な女性である。フロンは、姉の様に慕っていた。

『チエスター＝レン』は、18才の男性。若き宇宙航行学博士。宇宙博士を目指しており、フロンを歸と仰ぐ少年である。

茶色の髪に、色素の薄い瞳。まだ、あどけなさも残る少年であった。

セイドとリラは、自分より年下で博士号を持つチエスタに驚く。スキップが珍しくない時代、若くして博士号を取得する者も少なくないが、『核』という地球の最先端の集まる研究室に入る若い博士は、稀である。

因みにセイドとリラは、17才で兵士に招集された身であるため、高校すら卒業していない。

フロンの研究室のテーブルを皆で囲んだ。

シアが消えた、ことに関してフロンが説明を始める。

シアは昨日、フロンの計らいで無機質な観察室ではなく、フロンの研究室のソファで寝た。はずであった。

核内での鍵は、核に所属する者がそれぞれ持つ身分証。一般的なカード大の大きさで、厚みは3mm程。その中に指紋から静脈から、声紋など、個人を判別するものが何から何までインプリントされており、身分証とその本人の指紋があつて始めて、核の鍵、となる。

そして核の研究室は、ドアはオートロック。内側からはその研究室の管理者の持つ身分証がなければ開かず。外側からは、管理者の身分証と、指紋が必須。更に昨夜は、フロンはナンバーロックもかけていた。

この状態でシアは消えていた。

もちろん、核の本部にスペアキーがあるが、借りに来た人もなけ

れば、持ち出された形跡もなかつた。

何、それ……

セイドは、そんな言葉を口に出そうとして声にならなかつた。放心状態でフロンの説明に耳を傾けていた。

頭の整理がつかない、理解しきれない。あまりのこと。

「密室……」

リラがボソッと放つた言葉で、呆然としていたセイドは我に返つた。

「だつたんだな」

「ええ……」

何時になくリラ真面目な声を放つ。いつもよりも低く呟かれたり「の言葉に、場の空気は重くなつた。

『密室』といふ言葉がセイドの心に、強くのしかかる。

そんな中、再びリラが口を開く。溜め息混じりに。

「ロック解く方法は他に何もないんだろう？」

「いえ」

「!?

割とあつさうと出したフロンの否定の言葉に、セイドとリラは目を丸くする。それに対しフロンは、うつ向き、言ひ難そうに口を開く。

「ある、には、あるんだけど……。

あのね、核のセキュリティシステムに侵入するの」

「侵入……？ じゃ、じゃあ……」

「いや……」

思わず声を大にするセイド。だがフロンは、そんなセイドの言葉を静かに遮った。

「無理、よ……」

「え？」

再び、フロン否定の言葉。再び、放心するセイド。フロンはそんなセイドに気を使いつつも、静かに言葉を続ける。

「よく、考えてみて？ ^{コア}核のセキュリティよ、一晩や一晩で侵入できる様な代物じやないわ……」

フロンの絶望的な言葉が、セイドの心中に深く根ざる。

核は、地球の中心。

地球共和国の全てが、最先端が集まるところ。セキュリティシステムも、もちろん地球最高峰。

一晩や一晩でどうにか出来る代物ではない。そんな大変なものを、搔い潜つて昨日の晩、このフロンの研究室へ侵入。ピンポイントに、シアのいた昨日の晩。

そんなこと、並の地球人には無理である。

もしくは、中から。フロンの研究室の内部、シア、自ら……。

訳がからない。

一体何が起こっているのか。考へても考へても、思考は迷宮と化し、堂々巡りを繰り返す。

セイドは、体が自然と震え出す。行き場のない怒り。フロンの研究室に侵入した、何か。シアを連れ去った、何か。自分の前から、シアをいなくならせた、何か。

そんな何かに、怒りが込み上げる。

拳を、机にぶつける。

「一体、何なんだよ……っ」

鈍い打撃音と共にせ放たれたイドの言葉。切実で、悲痛な叫び。に、場の空気が重くなる。誰も何も言えず、静かに怒りに震えるセイドを、神妙に見つめていた。

重たい空気を切り裂く様に、乾いた小さな打撃音が響いた。誰かが、部屋の戸をノックする。フロンの返事と共に、鍵のかけていた戸が開く。

ケントとコリが、駆け付けていた。神妙な顔で肩を並べる2人。ケントがボソリと言つ。

「や。来ちゃったよ」

「ユリ、ケント……っ」

フロンは思わず立ち上がり、駆け寄る。

「……」軍医の仕事は

「ああ、うそ。今日は一号機が出る日じゃないしね。今日出るのは
見送つてから来たよ」

ケントとコリは一号機専属の軍医と看護師であった。本来、セイ
ドとリラも見送りはあるはずである。

「あ、セイド。隊長さんが『副隊長が何故見送りにいない…』つ
て怒つてたよ」

「あつそ……」

ケントの報告にセイドは顔をしかめる。今のセイドにせどりでも
よここと。

地球を守る空軍兵士、更にセイドは副隊長。だが、セイドにそん
な余裕は、今持ち合わせていない。

「ぐつ」

激しく、鈍い、打撃音。鈍器にて、痛烈に殴る音、が響いた。と
同時に、男の呻き声が漏れる。

シアは、自分を取り押さえようとした男に、肘鉄を炸裂させてい
た。男は仰向けに倒れ、気絶している。

「貴様……」

そんな光景を、傍観するかの様に、1歩離れたところで眺めるルインを、シアは睨みつけた。気絶している男はルインの部下、ルインの命令によりシアを取り押さえようとしていた。が、あっさりとシアの返り討ちにあつたのだ。

「なんのつもりだ。これは」

シアは自分の左手手首につけられたわつか、手錠、をルインの面前に差し出した。手錠、とはいっても、まだ地球上にはない特殊な金属製のわつかで、遠隔操作が可能なものであった。

「何つて、手錠」

「そんな事を聞いてる訳じやない」

ルインを睨み、怒るシアに対し、落ち着きはらつたルイン。そんな態度が、シアを余計に苛立たせる。

「なんで、こんな物をつけられなくちゃいけないんだと聞いてるんだ……っ」

シアの怒りの言葉に、ルインは静かにシアを眺めた。直後口元だけで薄く笑った。鼻で笑うかの様な、馬鹿にした笑い。

「お前には関係のない事だ」

「なつ」

「ヤツと笑うルインに、いくらシアでも、怒りは増幅する。

「私の身の上に起つてこることだ。何故『関係ない』になる?」

静かな、シアの怒りの言葉。ルインは口元の笑いを消し、マジマジとシアを眺めた。

そして、軽く眉間にしわをよせ、首を傾げた。

「お前、何故だ……？」

「は……？」

またも、主語のないルインの質問。意味が分からぬシアは、怪訝な顔をする。そんなシアにルインはため息深い溜め息を吐く。

「何故そんなに感情が豊かなんだ？」

「！？」

田を、見開いたシア。

ようやく質問の意味は分かつたが、今度は意図が分からぬ。シアは眉間にしわをよせ、疑問の瞳をルインへ向ける。

「お前、13才の時の自分を思い出してみる」

ルインの静かな言葉。シアはまだ意図が分からぬ。

「お前、言わないと何も出来ない、言われたことならなんでもやる。生きちゃいたが、『人形』みたいだつたらう

ルインの言葉に、シアは息を飲んだ。
と同時に、言われるがまま少ない記憶を遡る。

シアの脳裏に、幼い、13才のシアが蘇る。

無表情、感情がないのかと思つほど笑いもしなければ怒りもしない。話しかけられなければ、自ら口を開くこともなく、話しかけられても、極端に口数は少ない。

指示されるまでその場から動くことすらない様な、13才のシア。

そうだ……。

ルインの言葉に、かつての自分が鮮明に蘇る。

シアは、自分自身に問掛けた。心中で問い掛けた。今まで気付かずらしなかつた疑問を。

あの頃、私は、生きてはいるけど、確かに人形の様だったのに、何故私は今……、人形ではないのか、と。

「お手上げだ」

静まり返るフロンの研究室にて、リラのいやにあつさりした声が響く。瞬時に反応したセイドが、怪訝な顔でリラを見据える。

「探しよしねえじゃん」

リラが言い終わるや否や、鈍い打撃音を奏で、セイドの鋭い蹴りがリラに炸裂。リラは椅子からころげ落ちる。今のセイドに冗談は通じない。

リラを蹴りつけても、セイドの中のモヤモヤは晴れない。自然と握り締めた拳には、じつとりと汗がにじむ。

シア。シア。何処にいる？

そんな言葉がひたすら頭のなかで渦を巻く。ひたすら、ひたすらシアを呼び続ける。

不安と、行き場のない憤り。ただ願うのは……、

『シアに会いたい』

「俺……」

居ても立つても居られず、セイドはボソッ口を開いた。深刻な面持ちでそこにはいた面々はセイドを見る。

「探してくる……。」

「ええ！？ 何処に！？」

「その辺っ！」

とつそこに止める間もなく、セイドはフロンの研究室を飛び出した。残された面々は言葉もなく啞然と、セイドの出て行つたドアを見つめる。そんな中、リラが呆れた様に呟く。

「ア、たまに頑張り過ぎると無意味に突っ走るんだよな……」

ルインの言葉により、思い出した記憶。

シアは13才の時の自分を思い出し、言葉もなく立ちぬくしている。

人形だった。意思の持たない人形の様だった13才の自分。覚えている。関わる人はルインと、他2~3人の白衣を来た男達だけ。会話はなく、ルインに言われるがまま動き、言われないと動かない。

今時、ロボットですら、自ら『気を利かせる』時代。シアはそれ以下の生活をしていた。

今は何故、違う?

答えの出ない疑問が、頭の中で渦を巻く。

そんなシアを見て、ルインは首を傾げる。
シアを『創る』時、感情を植え付けると操るのに面倒が起きかねない。故にルインは、シアに感情は『えなかつた。だが。

これはどうこうことだ?

思い悩み立ちぬくシアの姿は、強くルインの言葉に反発してきたシアの姿は、どう見ても感情を持ち得ている。

13才の時の、ルインの側にいた頃のシアとは、明らかに違う。

何故、違うのか。
誰かに影響されたのか。

ルインは軽くため息をついた。

「シア」

ルインに呼ばれ、シアは思考の渦から抜け出し、我に返った。

「じつちに知り合いがいると言つたな
そいつらの名前は？」

「え……。何故……」

「いいから」

有無を言わさぬルインの態度。シアは何故だか逆らえず、諦めた
様に静かに口を開く。

「フロン、フロンティア＝ファスターに、リラ、リライアンス＝カ
ーライド。
……セイド、セイクレッド＝リーンカルス……」

何か暖かい物を感じた。セイドの名を口にした途端。
その正体はシアにはわからない。わからないが、それにより、自
然とシアの口元が少し緩んだ。

微笑んだのだ。

緩んだ口元に、シア自身は気付かない。

そんなシアに、ルインは我が目を疑つた。始めて見たものに、目
を見開かせる。

シアの微笑みは、すぐに消えていた。一度目を反らし、ルインが
再びシアの顔を見た時には、もう微笑みの欠片もない。今は、目を
見開き驚くルインを、キヨトンとして見上げている。

あまりにも一瞬のでき」と、夢か幻かとも思える。が、ルインは見てしまった。

微かに笑うシアを……。

『セイクレッジド＝リーンカルス』

シアが微笑んだ瞬間の、彼の名をルインは心に刻む。

「シア、お前は暫くこの部屋にいる」

「えっ、ちよ……っ」

シアのことは氣にも止めず、ルインは部屋を出、シアの言葉を遮る様にドアを閉める。オートロックな上、ルインは更にナンバー口ツクをかける。シアにはもう、どうしようもなかった。

とりあえず、『セイクレッジド』を調べるために、ルインは歩き出す。

静かな核の研究所の廊下に、セイドの荒れた息がこだまする。あちこち走つてシアを探し回つていたセイドは、息を整えるために立ち止まつた。

あちこち、とは言つても、核の研究室は広い。研究室所属ではないセイドがわかる廊下はたかが知れていた。

夢中で忘れていたこんな初歩的な事実。自分のふがい無さに、セイドは深いため息が出る。

だが、だからと言って諦める訳にはいかなかつた。

わかるところだけでも……。気を取り直して走り出すセイド。

同じ頃。

セイドの進行方向の先、およそ50m。1つの研究室のドアが開いた、白衣をまとう大きな男が出て来る。ルインである。

セイドの視界にルインが写る。

が、今のセイドにシア以外は気に止まらない。そのまま、走る。ルインはドアを閉めると、セイドが走つて来る方へと歩き出した。ルインの視界にもセイドが写る。

セイドの着ている制服で兵士だと分かる。何故兵士がこんなところに、と思いつつも、大して気には止めない。核に所属する者であれば、至る所を『通路』に使つことは良くあるから。

そんな2人が、

すれちがつた。

静かに歩くルイン。

必死にシアを探し走り続けるセイド。

2人の距離が、再び50m程離れた。その時、セイドはシアの名を呼んだ。何の気もなしに、ただシアを探すために。

「シアー！」

その言葉が、ルインの耳に届く。

急に出来事に、反応は一瞬遅れたが、ルインは弾かれた様に振り返った。しかし、セイドの姿は既に見当たらない。セイドは、廊下の十字路を左に折れていた。

とにかく追うルイン。が、セイドが曲がったでろう十字路で、四方を見渡しても、セイドの姿はなかった。

誰だ、あの男は。

ルインの脳裏に浮かび上がる。微かに笑ったシア。そんなシアが呟いた名前。呟かれた名前。

『セイクレッド＝リーンカルス』。

あいつか……？

暫くして、核の研究所の中をかなり走り回ったセイドは、ふと足を止めた。居ても立つても居られず、あまり地図を把握出来ていな細かい廊下をも走り回っていた。

「あれ？ ここ、さつきも来たぞ……？」

見覚えのない所のはずが、見覚えのある景色。完璧に、迷っていた。

額の汗を拭い、肩を揺らし大きく呼吸をする。体力には自信があったセイドだが、夢中でかなりの間走っていたため、上がった息が戻らない。壁によしかかり、息を整える。

そんな中でも、シアは何処にいるのかと、考へても考へても答えの出ないことを考え続ける。

そして、不意にとある考へに辿り着く。

シアは、この研究所に、それ以前に、核にすらいるとは限らないのでは？

地球最高のセキュリティを突破し、シアを連れ去った者。まだ近くにいる、なんてそんな可能性はあるのかと。

まさか、地球にすらいない……、なんてことも。

セイドの頭に絶望的な考へが浮かぶ。軽く顔を上げ、白い研究所の天井を見据える。深い溜め息をつき、壁にもたれたまま、脱力したかの様にその場に座りこんだ。

もしさうであれば、リラの言ひ通りの手上げ。

「何やつてんだろ。
俺……」

深いため息が、静かな廊下を響き渡った。

「にしても、あのバカは何処まで行つたんだ？」

フロンの研究室のドアを開け、廊下を見渡しながらリラが言つ。
凄い飽きれ顔で。もちろん、『あのバカ』とはセイドのことである。
心配そうな顔をしたフロンが、リラに声をかける。

「ねえ、リラ。

セイド君、研究所の地図なんて分かってるの？」

「うーん……。分かってないと思つぜえ？ 普段通り道にしてると
こ以外は」

「……やっぱり」

「迷つたねー。セイドのことだから」

「だねー」

心配そうなフロンをよそに、ケントとユリが呑気な口調で口々に
言つ。悪気はないのだが、顔は笑顔。緊張感のない2人にリラは呆
れつつも、その意見に大きくうなづいた。

「だ、大丈夫なんスか？ セイドわん」

チエスターが心配気に言つ。が、リラは軽く流す。

「あー、大丈夫大丈夫」

「い、いいの？ それで」

キヤリオも心配気に口を開く。フロンが、心配そうな表情は崩さ
ずとも、応える。

「まあ、うん……。大丈夫だと思つわ。あの子だし……」
「多分な」

フロンの言葉を遮り、リラが力いっぱい言つ。その言葉に静まり

返る一同。数秒後、フロンが頷く。

「ナハ。『ツク』、なのよねえ」

信頼を得ているのか得ていないので、微妙なセイドの扱い。キャリオが呆れて突っ込む。

「全然大丈夫じゃないじゃない」

所属員名簿室。
核^{コア}の本部横^{コア}には、核^{コア}の職員から、職員ではないが戦争のため所属している兵士に至るまでの情報を治めた名簿室がある。名簿、とは言いつてもそれを記録した専用のコンピュータが置いてあるのだが。

本来は核本部に属する者の所属員管理のための部屋だが、顔写真、名前、所属から年齢・性別程度なり、核^{コア}に所属する者なら誰でも見ることができる。

やはりコイツか……。

名簿室のコンピュータの前に座るルインがため息をついた。視線の先にはコンピュータの画面が浮かぶ。画面に映るのは、セイド、の情報。画面上のセイドの顔写真を見て、ルインは先ほどすれちがつた兵士を思い出す。

コイツが、『セイド』。

マジマジと、セイドの顔を見据え、ルインは軽く舌打ちをする。そして、本来してはいけない、否、出来ないはずの名簿室の情報のコピー、を行つた。いとも簡単に。

地球と、惑星トゥーム、の文明の差である。

ルインは、ついでにシアが口にした名前全てを調べる。

画面が2つ増える。リラとフロン。ルインはフロンの顔を見て、シアを保護していた者だと気付く。

ひとしきり、セイドとリラとフロンの情報をコピーする。それから、セイドの顔写真を見て、『チッ』と舌打ちした。あの『シア』を笑わせた者に、妙な苛立ちを覚える。

まあ、いい、と、気を取り直したルインはため息をつきつつ、コンピュータの電源を落とし、席を立つ。

ルインの目の奥には不気味な光が宿る。

シアは、ドアに思いきり蹴りを入れる。激しい打撃音と、蹴りを入れたシアの左足に軽い痺れだけが残る。

鍵をかけられ、見知らぬ部屋に閉じ込められたシアはドアを蹴破ろうとしていた。が、地球最高峰の施設、核は建物 자체が造りは頑丈である。シアの力を持つても人力で壊すのは不可能である。シアは軽いため息をつき、ドアに寄りかかった。

その時。

『ピッ』という機械音が響き、ドアが開く。急に動いたドアに驚いたシアが振り向くと、そこにはルインが立つていた。

「何をしている」

「なんのつもりだ……っ」

シアはルインを見るなり、待つてましたと言わん場か李に囁つ。ルインの言葉を遮つて。

「何がだ？」

「なんで私を閉じ込めるのかと聞いてる……っ！」

だんだんと激しくなるシアの言葉。が、ルインは相変わらず淡々と静かに口を開く。

「ああ。それは……」

ルインは、不意にシアの左腕を掴み、軽く引き寄せた。と同時に、鼻と口を覆えるスリープガスのスプレー缶をシアに押し当てた。

「！？」

「！」のためだ

驚き、何が起こってるのかわかつてすらいないシアを尻目に、ルインはやはり静かに言う。

不意をつかれたシアに、抵抗する間などない。あつと言つ間にシアの鼻と口の回りは大量のスリープガスに覆われた。

な……？

事態を理解する間もなくシアの意識は薄れて行く。シアの全身から力が失われ、膝を着く。シアの腕を掴んでいたルインの手は離さ

れ、完全に眠ったシアはその場に倒れた。

ルインがおもむろにポケットより赤いピアスを取り出す。シアの右耳に付くピアスと同じ色。美しい紅の石。まるで、シアの右耳のピアスとセツトの様なピアス。

が、違うのは、このピアスは普通ではない、といつも。機械が組み込まれ、耳につけることで、その者の神経へと繋がり、外部から命令を下せる。

シアを操るためのピアスである。

ルインは、そっとシアに傍らに膝をつく。そして、シアの左耳へ手を延ばし、ピアスをつける。

「いい、と、ルインは口許だけで笑う。

そして、握った手に隠れる程の小さな小型マイクを取り出した。ルインの声のみを拾う様に設定したマイクである。無線で音声を飛ばすタイプである。繋がる先は、シアのピアス。シアに、命令を下すためのマイク。

ルインは鋭い口調で言つ。言葉は、トゥーム語。

「シア。田を覚ませ」

その言葉に反応し、眠らされていたはずのシアの目が開く。そして、その場にスクッと立ち上がった。

そのシアは、無表情であった。ピアスと同じ色、と言つても過言ではない美しい真紅の瞳には、微塵の感情も感じられない。虚ろで、何処を見ているのかわからない。

先ほどまでの、自分の意志でルインへ食つてかかっていたシアと

は違つ。ルインの言つ『無表情で感情のない』シア。

ルインに操られたシアである。

ルインはシアが起き上がつたことで、操れたことを確認。再び口許に笑みを浮かべる。

が、その笑みはすぐに消える。代わりに現れたのが、冷徹な瞳。

「シア。聞け。

地球人、抹殺命令だ」

「ハイ

シアの、感情のない声が響く。とんでもないルインの発言にも、動搖の色すら伺えない。おもむろにルインがドアを開ける。

「行け

ルインの命令に、シアは歩き出す。

「あつ

フロンの研究室のドアから廊下を眺めていたリラが口を開く。その言葉に反応し、フロンも廊下に顔を出す。横道よりセイドが現れていた。

「あ

セイドもリラとフロンに気付き、走り寄った。セイドは無作為に研究所の中を歩き続け、なんとかフロンの研究室へと繋がる廊下へと戻ることができた。

「どうやら俺、戻つて来れたみたいだね」

「やつぱり迷つてたな。バーカ」

「うぬかこつ」

からかうりを余所に、フロンが言い憎しそうに口を開く。

「シアは……？」

戻れた安堵感に、少し緩んでいたセイドの表情が曇る。セイドは核の広い研究所中を走り回つて来た。が。

「全然、何処にいるのか……」

「そう……」

フロンの表情も曇る。

廊下で立ち話をしていたため、フロンの研究室からケント達も顔を出す。神妙な顔のチエスターとキャリオ。何処か呑気に見えるケントとゴリ。

「やつぱりと言つかなんと言つか

リラは茶化す。が、最早セイドは相手にしない。
「ア……、と、セイドは大きなため息をつく。

「なんか、もう、何がなんだか……」

『キャーッ』

『わからない』と、セイドが口ひそひつとじた瞬間、遠くから突然の悲鳴が響いた。女性の、声。只事ではない、悲鳴。

「…？」

皆は目を見開き、思わず声のした方へ顔を向ける。

悲鳴はまだ続いている。先ほどの女性の悲鳴を皮切りに、その女性一人ではなく、男女入り混じった数名の悲鳴が木霊する。

「なんだ！？」

流石に困惑した顔のリラが言つ。一方セイドは険しい瞳で声のじた方を見据える。

『シア』

何故か、セイドの脳裏に浮かぶシアの名前。理由はわからない、しかし、確信に近い程はつきりとセイドの頭にシアの名前が浮かんだ。何故？ セイド自身がそう考える。

何がが、セイドの本能が、やう訴えているようだった。

「……シア……」

セイドは聞き取ることができない程の小声で呟いた。聞こえはしたが、何を言つている今までわからなかつたりラが怪訝な顔をする。

「あ、！？」

「シアだ……」

「は？」

今度はははつさうと言つたセイド。の、言葉にこりはすうとこわぬうな声を上げる。リラだけではなく、皆が目を丸くしてこる。

「な、なんでわからんだけよつ」

「なんとなく」

「なんとなくだあー？」

……て、おいつ！

リラの言葉も最後まで聞かずに、セイドは走り出した。無意識に、体が動く。導かれる様に、セイドは一疋散に床を蹴る。

リラ達も後を追うが、セイドの足には敵う者はいない。

走る。悲鳴の聞こえて来た方へ。不思議な確信を胸に。一心不乱に。

シアの名前だけを唱えて……。

「シアー！？」

悲鳴の聞こえて来た角を曲がる。と同時に、セイドはははんだ。セイドの瞳に、ずっと焦がれていた者が映る。

シア。

シアが、いた。

名前を呼ばれたシアが振り返る。シアを見つけた、再びシアに会えた、そんな喜びに顔を綻ばせるセイド。

「シ……！？」

シアの名を呼びかけて、セイドは固まる。シアに会えた喜びに、シアしか見えていなかつた。しかし、体「」といひを向いたシアに、目を丸くした。

そして、不意に回りの状況が目に入る。

呆然啞然愕然、と立ち尽くすセイド。氷り付いたかの様に動けない。衝撃的な光景に。
ここで追い付いたリラ達。固まるセイドに声を掛けようとしてこちらも固まる。
そこに広がる光景。

赤。

そこかしこに、散りばめられた赤。シアの体にも、服にも、雪の様な肌にも染える、赤。

鮮やかな赤い、血。

シアの回りには、苦しそうにつめき声をあげ血を流す人、気絶なのか死んでいるのか、倒れて動かない人。血を流している人間は何人かい。

シア自身にもたくさん人の血。シアの血、というよりは、『返り血』である。飛んで来た血が、体に付いていた様であった。

少し離れていた物陰から様子を眺めていたルインが、セイド達に気付く。何か嫌な予感が頭をよぎり、『チツ』と舌打ちする。

何も言えず、何を言つて良いのかわからず、ただ佇むセイド。目の前の出来事が理解出来ない。理解したくない。セイドは、何を見てしまったのかがわからない。

リラやフロン、ケント・ゴリ・チエスター・キャリオは、怪訝な瞳で、シアを見据えた。

「なんだ、お前ら」

地球語ではない、惑星トゥームの言葉でボソッと呟くシア。疑問系の言葉ではあるが、抑揚のない言葉。体に、顔にすら付く血を氣にも止めない。血まみれでも、平然と佇むシア。セイドの頭に、4年前のシアが鮮明に浮かぶ。

惨殺された人々の真ん中で、血まみれで佇んでいた幼いシア。今のシアは、目の前の光景の中のシアは、年齢は違えど、正にあの時と同じ姿でそこにいる。

セイドの瞳に、しつかりとシアの姿は映る。シアを見据えている。だが、セイドには未だ何も理解できない。

信じられない。

信じたくない？

分からぬ。

分かりたくない？

頭が動かないセイド。何か言おうと、シアに話しかけようと、シアから事の真偽を聞きたくても、体は動かない。セイドの体だが、セイドの言ひ事を聞かない。

ただ呆然と、シアを眺める。

やつとの思いで言葉を呴くまで、一体何分かかっただろうか。その言葉は、シアには届いたのか届いていないのか。宙に溶ける。

「シ、……シア……？」

第参話 消えた華 謎 終了

第四話 ガラス玉の涙 光(ライト) (前書き)

もし 読んで下さっている方がいらっしゃるのであれば

本当に 毎度毎度お待たせして すみません

第四話です

良ければ「」見下さごませ

第四話 ガラス玉の涙 光(ライト)

コア
核の研究所の長い廊下。血まみれの人々が倒れ、うめき声が響く。鉄の匂いが鼻に付く。

そんな中に、反り血まみれの様なシアが佇む。服に、腕に、髪に、顔にすらついた血を、拭うでもなく、気にもせず。静かな瞳で、呼び掛けてきた主であるセイドを見据える。

セイドは言葉が出てこない。ただ、セイドの脳裏にはあの4年前に見たシアがフラッシュバックする。4年前のシアと、今、目の前にいるシアが重なる。あまりにも、重なり過ぎる。呆然と凄い出で立ちのシアを眺める。理解できない。理解したくない。

これは……？ 一体なんなんだ？

遠くで傍観しているライン。おもむろにシアのピアスへと繋る小型マイクに向かってトゥーム語で呟く。

「殺せ」

険しくなるでもない、なんら表情を変えずに紡がれる残酷な言葉。そんな言葉が、マイクからピアスを伝い、シアへと届く。

『殺せ』

不意に耳に響いた冷酷な命令に、シアは頭よりも先に体が反応。シアの目が微かに鋭くなり、セイドをめがけて地面を蹴る。

人間技とは思えぬスピードでセイドに迫るシア。流石に我に返つたセイドは思わず叫んだ。

「み、皆下がつてつ……！」

セイドが言い終わるとほぼ同時に、シアは鋭い回し蹴りを繰り出す。すんでの所で身を屈める。なんとか避けることのできたセイド。持ち前の運動神経により頭で考えるよりも、体が反応することでセイドは避けることができた。が、頭は回らない。屈んだままシアを見上げる。激しく困惑に揺れた瞳で。

「シ、シア……？」

避けた……？

傍観していたルインが目を丸くした。あのシアと張り合えるヤツがいるのか、と。

無表情で、悠然と構えていたルインの表情が、動いた。

シアは今度は、セイドをめがけ飛び蹴りを繰り出す。セイドは後ろへ飛び、間一髪避ける。そのまま地面に手を付きバック宙の形で地面に降り立つ。

そんなセイドに、シアは無表情ながらも驚いていた。今まで、シアの攻撃を避けた人はいなかつたから。初めての経験に、驚いていた。

地面に降り立つたセイドは、相変わらず呆然としたままである。理解しようとしても理解できない。『なんで』『どうして』、疑問ばかりが頭の中で渦を巻き、頭が働かない。

「シ、シア……？」

やつとの思いで声を出す。呼び掛ける。一步一歩、ゆづくらじン
アに近付く。

その瞳は、呆然としつつ、悲痛に揺れる。

「どうしたの？ シア……」

そつとシアの肩に、セイドは手を置く。優しく、だがしつかりと
力を込めて掴む。

血を流しつめく者。死んでしまったのか氣絶しているのか、血に
染まりながら動かない者。その場にいあわせ睡然とする者。皆が、
騒ぐでも人を呼ぶでも助けを呼ぶでもなく、何故か静かに事の始終
を静かに眺めている。

「俺だよ？ シア……」

切実なセイドの言葉が響く。シアの表情は、やはり動かない。

「ねえ、セイドだよ？ 分かるよね……？」

思い出す訳あるか。操られたシアは、私の言つ事しか聞かない
のだからな

遠くから事を見守るルインが、胸の内で呟いた。シアを操つてい
る余裕から、先ほどの一瞬の焦りは消え、再び冷静に傍観している。
必死なセイドを見て、鼻で笑う。

セイド？

シアは頭の中から、『セイド』と書かれた言葉を探す。操られたシアは、ルインの書かれたもののみを聞く様になつてゐる。そのシアが他の人の書かれたものに耳を貸すなどとルインは有り得ないと思つてゐた。

が、シアはセイドの言葉に耳を傾けてゐる。ルインには伝わっていないが。普段のシアもさることながら、操られたシアにも何かしら変化が起こつてゐる。

シアはセイドの顔を見据える。頭一つ高いセイドの顔を、しっかりと首を上げて。

『セイド』と書かれた頭の中で反芻する。

無意識に目を閉じて記憶を遡る。

シアの脳裏に今までの、操られていた間の記憶が次々と溢れていく。たくさんの人々を惨殺してきた記憶。

人の命を奪つて来た記憶だけが次々と溢れてくる中、ふと命を奪わなかつた少年の顔が浮かぶ。

ハツとしたシアは目を開ける。目の前のセイドの顔睨む様に見る。

そんなシアの態度に驚いたのは、ルイン。軽く身を乗り出し、眉間にしわを寄せた。

「シア？ どうしたの？」

無表情に近いのだが、どことなく困惑した顔で自分を見上げるシアに、セイドは疑問を投げ掛ける。

シアはセイドの言葉には何も反応はせずに、やつやかと浮かんだ

少年をもう一度思い出す。わざと鮮明に。そして、田の前のセイドと見比べる。

息を飲んだ。

シアの脳裏に浮かんだ少年、それはもちろん4年前に一度、田が会っただけのセイド。15才のセイドである。

『似てる』。そう感じたシアは思わず両手をセイドの顔へ伸ばす。そして、頬の辺りを包み込み、グイッと自分の方へ引き寄せた。

「わっ

セイドとシアには25㌢程、頭一つ程の身長差がある。それゆえに、シアはよつしつかりと見ようとしたのである。

セイドは、驚くと同時に田前に迫るシアの顔に、思わず顔が赤くなる。

そんなセイドを氣にも止めず、シアはセイドの顔を凝視。そして確信。

あの時、田が会った少年と田の前にいる男は同一人物である、と。

「お前、私と一度、会つたことがあるな?」

シアがトゥーム語で呟く。もちろん、セイドには云わない。云つたのは、伝わってしまったのはルイン。

な、何……!?

シアの言葉に顔色が変わる。

会つたことがあるだと……?

ルインにはシアの言つことが信じじることができない。操られたシアは、目についた『地球人は全て殺す』様にしてあつたからだ。会つたのに殺していない。そんなことはあり得ないのだ。

え……？

セイドは、シアの言葉に目を点にした。語尾が上がつたため、何か問われたのであらうことは分かつたが、意味まではわかる訳がない。

「あれ……？」

困惑しながらもしつかりとシアを見据えていたセイドは、シアの体の中で、昨日とは違う所をを発見した。

「ねえ、シア。昨日……、左耳にピアスなんてしてたっけ……？」

セイドはそつとシアの左耳に手を伸ばす。シアの瞳の様な真紅のピアスをそつと撫でる。

操られたシアには、『昨日』がいつだかわからない。無表情ながらも、わずかに首を傾げる。

シアの左耳のピアス。操るためのピアス。

ハタから見て普通となんらかわらないピアスではあるが、ルインは若干焦りを覚える。慌ててシアに向かつて命令を下した。

「殺せ」

不意にシアの体が反応。ピクリと指先が動いた。ルインは追い討ちをかける様にもう一度言つ。

「殺せ……！」

その瞬間、シアの瞳が僅かに鋭くなり、『殺氣』が宿る。瞬時にそれを悟つたセイド。とつさに後ろへ飛ぶ様に体を引く。……が。

鈍い音が響いた。何かを切り裂く音、人を切る音。静まり返つていた辺りが、緊迫して息を飲む。とつさに、歎声は出ない。

シアの右手が、素手の右手がセイドの胸を切りつけた。

「セ……ッ」

静まり返つた空氣を切り裂き、響くリラとフロンの声。だがその声は最後まで音にはならない。

その上、セイドの耳には届かなかつた。

セイドには理解できないことが、また起つてゐる。

な……？

声も出ず、心の中で呟いたセイド。切りつけられた反動でそのまま後ろに倒れそうになる。すんでのところをリラに支えられ、セイドはその場に座り込む。

駆け寄るフロンやケント達。

何……？

セイドはそっと傷口に手を当てる。生暖かい体液の感覚。手を目前に掲げると、鮮やかな赤が視界に入る。

とつさに少しでも引いたお陰か、致命傷ではない。でも、出血はかなりの量。場所も胸、ということもあり、かなりの重傷である。医者と看護師であるケントとヨリ、とつさに持っていた緊急医療道具を取り出し、早急に治療にとりかかろうとしていた。

これは、何？

セイドは、不思議と痛みは感じていなかつた。それよりも、ただ目の前に佇むシアを眺めていた。

ねえ、シア。これは……、何？

わからない。セイドには意味がわからない。我が身に起こつたこと、これを起こした人。理解できない。理解したくない。

訳がわからない。考えたくても頭が回らない。理解したくない、だから考えることが出来ない。

ひたすら疑問だけが頭の中を回る。渦を巻いて、それ以外何も浮かばない。

一体、どうしたの？ ねえっ、

シア……ッ！

声にならない声で、叫ぶ様にシアを呼び掛けて時、セイドの瞳から一筋の涙が溢れた。堰を切った様に溢れた。

シアが田を見開いた。セイドの瞳から溢れ出る滴を見たら、心臓が高鳴った。

シア自身、何故だか分からぬ。が、セイドの涙がシアの心の中で、何かを揺るがした。シアは、田を見開いて、涙するセイドを見据える。田を、逸らせない。

反応した……！？

ルインもまた、田を見開く。あまりの予想外なことに。ヒカルが叫ぶ。

「シアッ！ 殺せ……、殺せ！」

シアの指先が、ピクリと反応する。だが、先ほどの様に、体全体がすぐさま反応することはなかった。何かがシアの中で、その反応に歯止めをかける。

セイドはケントの治療を拒否し、ヨロヨロとおぼつかない足取りで立ち上がる。今は自分の治療などよりも、セイドにはシアの方が重要であった。皆の心配の声も、今のセイドにはいまいち届かない。自分の傷なんかよりも、どう見ても様子の違うシアの方が心配であった。

よろめきつつも、セイドは再びシアの前に立つ。そんなセイド、ヒカルは固まつたかの様に立つ。セイドの姿を追つ。シアは固まつたかの様に立つ。田だけで、セイドの姿を追つ。

「シア」

セイドの、悲痛な切実な呼び掛け。に、ビクッと、今度は体全体で反応するシア。と同時に、耳にはルインの声が響く。

『殺せー。』

ピクッと、またも指先だけが反応。すぐさま、セイドの声が響く。

「ねえ、シア。俺のことは、忘れた?」

一步、シアに近づくセイド。シアの瞳は困惑に揺れる。

『シアッ。何をしてるんだー! 早く殺せー。』

静かに響くセイドの声とは反対に、頭ごなしに怒鳴りつけるリン。

耳元に直に響く声と、目前にて悲痛に語る声。

2つの言葉にて、シアは混乱する。

どちらを聞くべきなのか、どちらを信じるべきなのか、わからない。その判断を、今のシアにはつけることが出来ない。

シア自身、今まで経験したことの無いほどどの混乱、困惑。文字通り、シアは頭を抱えた。

「ねえ、シア……ッ。どうしたの?」

『シアッ! どうしたんだー!』

「俺のこと、思って出してよ……っ

『早くその男を殺せ…』

シアツ！

2人のシアを呼ぶ声が重なる。

ルインの声に反応するシアの指先。だが、シアの中の何かがそれを引き止める。

セイドの声に反応するシアの体。だが、何かがそれを引き止める。

今までは、ひたすらルインの言つことだけを聞いていれば良かつた。何も考えず、ひたすら。だが、今、迷いが生まれた。

シアはそんな自分自信にも困惑。

何故、ルインの言葉に反応する指先を引き止めてしまうのか。何故、この目の前の男の言葉に体が反応してしまったのか。自分は、どうすべきなのか。

わからない。

「シアツ！ 私の言つことを聞け！」

何故だ……つ

シアに繋がるマイクに向かって叫びつつ、ルインは考えた。操っているにも関わらず言つことを聞かないシア。予想外、いや、ルインにとっては有り得ないこと。

くそつ、ヒ、心の中で悪態を付く。

「シア。ねえ、どうしちゃった訳……？」

セイドは、シアの手を取る。

優しく自分の手を包み込むセイドの手から、シアに何か暖かなものが広がる。人の温もり。今まで生きて来て、知らなかつたもの。優しく、心落ち着くその暖かなもの。

だがそれが、返つてシアを困惑させた。

セイドは、シアの困惑した瞳を見つめる。とめどなく流れる血も気にせず、気にもならず。セイドの歩いたところに、赤の斑点が続く。

「シア……ッ、一体どうしたんだ……ッ！」

セイドの悲痛な叫び。シアは再び目を見開く。シアの心に少しづつ染み渡る……。のをルインが阻む。

『シアッ！ 早く殺^やれ！』

だんだん感情的になるルイン。耳に痛い程叫び散らす。

『シアッ、何をしていろーー早くその男を殺せ！』

殺す……？ この男を……？

ルインの言葉を心の中で反芻させつつ、シアはセイドを見上げる。切実な、辛そうな、瞳に涙を溜めたセイドの顔がシアの瞳に映る。シアは、そんなセイドの顔に、胸が締め付けられた。耳に響くルインの『殺せ』という言葉により、更に胸が締め付けられる。

そして、生まれて初めてルインの言葉に疑問的な考えが頭に浮か

んでいた。

殺す？ どうして……？

シアはセイドの瞳を見つめ、セイドに手を握られ、立へぬべく。
一度生まれて疑問は、あつといつ間に膨れ上がる。

どうして、殺さなければならぬ……？

「シアッ！」

何を言つてもこまいまいち反応しなくなつてしまつたシアにルインは躍起になつていた。

シアが自分の言葉を聞かなくなる。そんなはずはない、と、頭の中で叫ぶ。

『シアッ！ 早く殺せ！ 命令だつ！』

ハッ、とした。シアの頭に『命令』といつ言葉がひつかかる。

『命令だから……？

再びシアの体が、指先がルインの言葉に反応を示す。『命令』、
そんな言葉がなんだかしつくり来てしまつた。

そ、うか……。命令だから……。

「シア……」

シアがルインの言葉に納得しかけた時、セイドが不意にシアの名を呴いた。シアの瞳に、セイドの顔が焼き付く。ルインの言葉反応しかけた体にストップがかかる。

命令だから、この男を殺す……？

またも疑問が生まれる。目前のセイドの悲痛に歪む顔が、シアの動きを鈍らせる。

殺さなくちゃ、いけないのか……？

「ねえ、シア……」

セイドはボソッと呴いた。シアを諭す様に、優しく……強く。内から溢れる熱い想いはたくさんあれど、まくし立てない様に慎重に言葉を紡ぐ。

「ちよっとでいいから、俺のこと思い出すとして見て……？」

少し収まりつついたはずのセイドの涙が再び溢れ出す。
「どうして俺のこと忘れちゃったのかはわかんないけど、君は絶対俺のことじつてるから」

『シアジー』

セイドの言葉に続け様にルインは必死に叫ぶ。

『やの男をやつせと殺せー。』

『シア。思い出すよ……』

シアは、もはや何も考えられなくなつていた。

ルインの言葉が頭に響き、セイドの言葉が静かに流れる。ルインの顔が脳裏に浮かび、セイドの顔が目に焼き付く。

「ねえ、俺だよ……？」

『シア……ッ！ その男を殺せ！…』

2人の声に挟まれ、シアは何も反応出来なくなっていた。どうしていいかわからない。どうすることもできない。ただ立ち尽くす。

『その男を……、セイクレッド＝リーンカルスを殺せ！…』

セ……？

シアの瞳が見開かれる。不意にルインの発した『セイクレッド＝リーンカルス』と言う言葉に。両の耳にピアスを従えたシアに、その名前が何か引っ掛けた。

「ねえ、シア。俺だよ……？」

セイドの涙が止めど無く溢れる。だがそんなことは気にせぬセイドはシアの肩に手を置く。いや、その手にも次第に力が入る。シアの肩を軽く握り締め、呟く。シアの耳元で。そのまま、シアの肩に突つ伏すかの様に。

「セイド。

セイクレッド＝リーンカルスだよ？」

セ。

セイクレッド……、リーン、カルス……？

再び耳にした『セイクレッド=リーンカルス』という名前に、シアはまた何かに気付いた。さつきよりもその何かは大きくなる。何かは、分からぬ。だがその名前が、心の中で何かを揺り動かし、心の中で何かにコトリとはまる。

心にひつかかる。ひつかかる。
聞いたことのない名前に聞き覚えが……。

セイクレッド=リーンカルス。

心の中で、その名前を呟く。見開かれたままのシアの瞳。真っ直ぐにセイドを見据えたまま。

シアの脳裏に、うつすらと、次第にはっきりと昨日の出来事が浮かんでくる。

いや、『セイクレッド=リーンカルス』のことが浮かんできた。

セイ、ド……？

「セ、イ、ド……？」

頭に大きく浮かんだ言葉を、シアは無意識のうちに呟いていた。セイドとルインが反応したのはほぼ同時。

ルインは眉間の皺を深くさせ、セイドは目を見開く。シアの肩に突つ伏していた顔を思わず上げ、シアの顔を、瞳を覗き込む。

呆然としたかの様に見開かれたシアの瞳。静かに真っ直ぐに、セイドを見上げる。

シアの脳裏に、次々と鮮明に今までのことが蘇る。核に来てから

の「」と。セイクレッド＝リーンカルスという人物を中心に、蘇る。

シアの瞳に、驚き目を見開いたセイドが映る。

ああ。セイドだ。

胸中で呟いた。セイドといつ存在をしつかりと認識した。

そしてシアの瞳から、一筋の涙が溢れた。

「シア……？」

その涙に、セイドは驚いた。シアは、流れる涙を止めようともせず、セイドひたすらを見上げる。

不意に響く乾いた音。

弾ける音。シアの左耳で、赤い宝石が飛び散った。ルインにつけられていたシアを操るための道具が、急に音をたてて、壊れていった。

当然、ルインによる操りの効果は、切れる。

「シア。ピアスが……」

セイドがシアの左耳にソックと手を伸ばす。

「セイド……？」

シアは呆然と呟く。急に操りの効果が切れる、我に返り、意味が分からぬ。シアには、操られている間の記憶が一切なかつた。

今のシアにとつては、目が醒めた瞬間に目の中にセイドが現れた

様な感覚だった。

「シャツ！ 思い出したー？」

セイドは歓喜の声を挙げる。が、シアには意味が分からない。

「何を言つてるんだ？ それより」

怪訝な顔をしてシアは辺りを見回す。「ここ何処だ？ 何故私は
なくなつたのはシアの方である。

え……。

シアの言葉にセイドは我が耳を疑つ。セイドからすれば、急にい
なくなつたのはシアの方である。

「それは、こつちが聞きたい位……、シア？」

辺りを見回していたシアが不意に固まる。一点を見つめて凍り付
き、眉を潜ませた。視線の先には、セイドの胸の大きな傷。

「セイド」

「え？」

「この怪我、どうした……」

言葉途中で、シアは声を詰まらせた。不意に視界が歪んだから。
そのまま、意識が遠のき崩れる様に倒れる。とこそこそセイ
ドが支える。

「シャツー？」

倒れた反動か、砕け飛んだシアのピアスが、シアの耳から落ちる。カラント音をたて転がつて行く。が、今のセイドは気付かない。

『「」の傷どうした』って……？

意識を失う直前のシアの言葉が、頭の中で渦をまく。信じられない言葉。傷をつけた本人からの傷の理由を聞く言葉。

「セイド」

「セイド君……」

セイドの後ろより響く男女の声。セイドは我に返る。振り返ると心配そうなリラとフロンが佇んでいた。

「大丈夫？」

「全くだ」

「リラ、フロンさん……。

うん。俺は大丈夫。それよりもシアが……つ

急にセイドの視界が歪み出す。リラとフロンにより緊張の糸が途切れたセイドの体に、胸の大きな傷の影響がよつやつと出始めたのだ。

「セイド……？」

「大丈……」

「」から先、リラやフロン、ケント達が口々にセイドに声をかけるがセイドの耳には届かなかつた。セイドの意識は闇に紛れる。シアを支えたまま、軽く抱き締めて、その場に倒れこんだ。

少し離れたところから全てを見ていたルイン。腕を組み、険しい顔をして佇んでいた。

先ほどの出来事、操っていたはずのシアに起じた有り得ない出来事について考えていた。

一体何がどうなってんだ……っ。

ルインの脳裏にセイドの顔が浮かぶ。

あの男、シアに惚れている……？ それにしたってあのピアスを！？

ルインの手に力が入る。そんな訳はない、と思いつきり舌打ちをする。だが、実際目の当たりにしてしまった光景。

シアの反応。

何故か、弾け飛んだピアス。

絶対だつたあのピアスが。再び舌打ち。

『地球人』とは、何のものなのか……？

体が、重い……。

意識を取り戻しかけているセイド。重い瞼をソッと開ける。震む

視界が徐々にはつきりとした輪郭をおび、見覚えのない天井が目に入った。

「お、セイド」

視界の端からリラが現れる。

「やーっと気付いたか……」

「セイド君ー？」

リラの言葉に、リラを押し退けセイドに駆け寄るフロン。心配のあまり、押し退けられつまづきかけたりラには気付かない。

「セイド君ー？ しつかりしてつ。大丈夫！？」

セイドの視界ははつきりしたが、意識はまだはつきりしない。朦朧とした意識の中、『フロンーツ』『えつ、何！？』というリラとフロンの一悶着を聞く。次第に意識がはつきりとしてくる。

ここは、核の病院。^{コア}

シアの、いや、皆は知らないがルインの起こした事件により負傷した者、シアも含め総勢35人を収容し慌ただしくなっていた。例外なくセイドも収容され、医師達によつて胸の傷に併合の治療が行われた。そして、目を冷ましたのは3時間後。

「……あれ？ ここ……？」

ぼやけた視界のまま、セイドは呟いた。次第に見慣れぬ天井がはつきりとし、意識もしつかり覚醒する。と同時に、倒れる前の出来事が頭をよぎった。

「せうだつ！ シア……っ！」

「痛……っ」

しかし、慌ててベッドから起き上がったため、胸の傷に響く。言葉を詰まらせ、つづくまる。

「じゅじゅじゅじゅ。まーだ動にちゃ駄目だつて

不意になんとなく呑気なケントの声が響く。続けて隣のコリが口を開いた。

「せうだつ。まだ傷、ふさがりきつてないんだよー」

「ケント、コリ……」

2人は医者と看護師であるため、負傷者の手当てに追われていた。が、起き上がったセイドに気付き、様子を診にきたのだった。

「出血多量で危なかつたのよーっ

「え、嘘……」

フロンの涙田の悲痛な叫び。セイドは一瞬青ざめる。が、助かって今はそれどころではない。セイドにはそれよりも氣になることがあつた。

姿の見えない、彼女。

「ねえ、といひで……、シアは？」

セイドに倒れる前の記憶が鮮明に蘇った。なんだか意味がわからなあシアの状況。

自分に怪我を負わせたシア。ではあるが、セイドのシアへの情は失せることはなかつた。

「 いじりだ、いじり 」

リラが自分の背後の壁を指差す。壁に見えていたが、大きな病室を個室に分けるための仕切りであつた。リラが端にあるボタンを押すと、仕切りはゆっくり開いた。その向こうでは、シアが静かに眠つていた。

シア……。

静かに寝息をたてるシアに、セイドは安堵のため息を漏らす。ひとまずシアにまた会えた嬉しさを噛み締めた。

のは一瞬。シアに起こつていた訳の分からぬ事態を思いだす。そして、自分が気を失つている間に何かわかつてはいいかと、フロンへ問掛ける。

「ねえ。シアは一体……？」

「それが、もう何がなんだか、さっぱりで……」

神妙な顔のセイドに、フロンの表情も曇る。

セイドが倒れた後、事件の起こつた場所は騒然となつた。

まずは負傷者の収容。医者も看護師も他の人々も関係なく。ケントとコリはもちろんリラやフロン、チエスターとキャリオも負傷者の病院への収容を手伝つていた。

そして、この前代未聞の事件に、警察も動き出した。今は現場検証をしている。

まだ、シアのところへはきてないが。

セイドの頭の中では、先ほどのことがグルグルと回る。信じられ

ない、信じたくないことを一つ一つ思い返す。あれはなんであつたのか。考えたいが考えられない。想像が付かない。

そんな中、一つのことを思い出した。

「あ。ねえ、ピアスが飛び散つたんだけど……」

「ああ、知ってるわ。でもね、そのピアスがないのよ」

フロンの言葉にセイドは目を見開く。セイドはピアスが砕け散つた瞬間を目の当たりにしていた。確かに砕け、シアの左耳より落下して行った。

セイド自身が倒れる直前の出来事ではあるが、突然、更に勝手に砕けるピアスという驚きの状態にはつきりと覚えていた。

「ええつ？ なんでつ？」

「それがよお」

リラが不意に口を開く。

「怪我人とかの収容とかでバタバタの中、この俺様がピアスのこと思い出したんだけどよ。んですぐ探したんだけど、それがどうここもねえのよ」

「な……」

「じいか呑気に語るリラ。緊張感も危機感も感じられない。反対にセイドは真剣に耳を傾け、思わずリラの胸ぐらに掴みかかった。

「なんでつ？」

「俺が知るかよ」

リラの呆れた様な声で容赦なくセイドの言葉を切り捨てる。固ま

るかの様に途方に暮れる。

セイドは考えた。出来れば考えたくもないと思える様な、シアの身に起こっていた何か。確かにしつかりと見てしまった信じたくない状況。だが、しかし、逃げていいだけはいけない。

必死に考える。だが、疑問だけが次々と浮かぶだけで何も答えるは見えて来ない。

「ねえ」

ポツリとセイドは呟いた。誰にともなく。神妙な顔で。自分だけでは何も見えて来ない疑問を外に投げ掛ける。

「さっきのシア、普通じゃ……、なかつたよね

「……ええ。そうね」

フロンが呟く。セイドの言葉によつフロンの、リラやケントと口

りにも、先ほどのシアの状態が鮮明に蘇つた。

誰もが、『普通』とは言えない状況。

一つ同意を得られて、セイドの想いが闇を切つた様に溢れ出す。

「俺のこと分かんなかつたし、あんな、血まみれで……」

「セイドッ！」

セイドが真剣に言つ言葉を遮り、誰かが叫んだ。セイド達の後ろから。振り返るとそこには、息を切らした隊長が立つていた。

「隊長っ？」

セイドとリラが田を丸くし、同時に口を開く。隊長は早足にセイドの所まで来るや否や、もの凄い形相で怒鳴った。病院なにも関わらず。

「貴様あ！ 怪我とは何事か一つ！ 貴様が死んだら誰が地球守るんだ!? 自分の身は自分で守れ！…」

その後、隊長はリラによつて病院から引き出された。

その日の夜。

皆が寝静まつた病院。シアは静かに田を覚ました。まだはつきりとしない視界ながらも、ゆっくりと起き上がつた。

眠気眼のまま見上げると見知らぬ天井、寝てゐるベッドより一回り大きいだけの部屋。枕元にある数個のボタン。

「…」

素直な疑問を呴くシア。当たり前だが受け取る相手もなく、部屋は静まり返つてゐる。

ゆつくつと当たりを見渡すと、シアにとつて右側の壁に着いたボタンが田に付く。身を乗り出しボタンを押すと、その右側の壁が開く。その向ひではセイドが眠つていた。セイド…。

シアは軽くため息をつく。胸中で静かにセイドを呼んだ。

一体、何がどうなつてゐるのか。

シアは記憶を辿る。が、シア曰くのあの男、ルインによつて何かを吸わされてから、先ほどの胸から血を流したセイドに会つまでの記憶が、ない。必死に思い出そつと記憶を探るが、いろいろな出来事が頭の中で渦を巻くが、その間の記憶はまるで思い出せない。

あの男……。

シアの脳裏にルインの姿が浮かぶ。どれだけ考へても何も分からぬが、とりあえずルインに何かされたのであるう、といふことだけはわかつた。

ルインに吸わされた何か。それから記憶がないことを考えれば睡眠薬かそれに類似したものであろうことは予想つくが、記憶がないままルインの姿は消え、全く違つ場所にいたことが謎でしようがない。

あいつ、何者だ……？

ルインは目前の小型の画面を眺め、深いため息を付いた。手中に收まる程の小さな機械から与しされるその画面は、先ほどシアが暴れた事件の報告書であった。もちろん警察の。ルインからすればコンピュータを介し、書類一つを盗み出すことくらい、雑作もないことであつた。ましてや、裏ではしつかり繋がつてゐる核内コアの施設同志のコンピューターともなれば、かなり簡単であつた。

『死亡者なし』、か……。

ルインは機械のボタンを押し、画面を消した。

腕を組み、眉間に皺をよせる。再び深いため息がこぼれる。

シアに、ルインからすれば想定外の変化が起きていた。

ルインにより操られていたのにシアは、『殺せ』と命令されたにシアは、あの時は誰一人として殺していなかつた。

今まで、一度として有り得なかつたことである。

何故だ。あのシアに、理性でも産まれたというのか……！？

ひたすら『殺さなかつた理由』を探るルインの脳裏に、一人可能性は低いと考えていたが思い当たる節のある兵士が浮かぶ。

セイドである。

あの男は、間違いなくシアに惚れている。だが、まさかシアまで

……！？

まさかそんなことが……！

ルインにとつて、『有り得ない』ことだつた。

シアがルインの命令に背くことも、シアが誰かに興味を示すのも。ルインが『シンシア』という存在を作る時、感情という『人間らしいもの』はなに一つ与えなかつた。感情があつては、操るにあたり何かと面倒であつたから。

シアは、言われた事しか、というよりも、言われなければ何も出来なく、言われた事はなんでもやる。『生きた人形』であつた。

そして、ピアスにより更に強固に命令しか聞かない様にしていたにも関わらず、死者は出なかつた。

ルインの目から見ても、セイドと会つてからの操つていたはずの

シアは、もはや人形ではなかつた。

ガサツと、ルインは白衣の内ポケットより小さな袋を取り出す。袋の中には、碎けたシアの赤いピアスが入っていた。シアが倒れた後の混乱に紛れて回収してきたのだ。

ピアスを眺めるルインの眼光が鋭くなる。ルインの脳裏には、ピアスが碎ける直前の困惑したシアが思い出されていた。

シアの流した涙。

ルインはそれを、初めて見たのだつた。

軽くため息をつき、碎けたピアスの入つた袋を握り締めた。このピアスを碎いたのはシアの力やのか、それともセイドの力なのか。ぐるぐると迷宮の様に思考は巡る。

あるいは、両方……？

第五話 かすかな灯 暗（ブラック）（前書き）

もし

待つて下さっている方がいたとしましたら

大変長らくお待たせ致しました（汗）

SINCERE シンシア

第五話です

第五話 かすかな灯 暗（ブラック）

翌日の朝。

忙しい朝の病院。だが今日は、いつも以上に慌ただしい。昨日収容された多くの患者のために。白衣を来た人々が動き回っている。核の病院には、核内で働く者に限り面会時間という概念がない。そのため、更にぐったり返していた。

そんな中、リラ・フロン・ケント・コリ・チエスター・キャリオもセイドとシアの様子を見に病院へ訪れた。ケント&コリは、昨日はとっさに怪我人の手當に参加していたが、本来は病院ではなく軍の医師と看護師であるため、夜は帰宅していた。

セイドの姿が視界に入った途端、リラは呆れ顔でわざとらしく豪快にため息をついた。

そこには、ベッドの上でスヤスヤと眠るセイドと、セイドのベッドの近くの椅子に腰掛け、セイドのベッドに顔を伏せて眠るシアの姿があった。まるでシアはセイドに寄り添うかの様で、なんとも言えない恋人同士かの様な雰囲気が漂っていた。

「コイツら、いつのまにこんなラブラブになつてんだ……？」

リラが呟く。見た瞬間の素直な感想。皆も思わず頷く。その時、声のせいか人の気配のせいかセイドがゆっくりと目を開けた。

「……ん？」

「お、セイド。起きたか？」

セイドは眠気眼で辺りを見渡す。までもなく、直ぐにセイドのベッドに伏せて眠るシアを見つけた。一瞬固まつた後にセイドは驚き声を上げる、が声にならない。

自分に寄り添うかの様に眠るシア。なんだかとてもなく恥ずかしく嬉しい光景に顔が赤く染め上がる。だが何故こんな事態になつているのかわからず、目を見開くばかり。

「シアッ！？」

「よお。セイド～」

リラは慌てふためくセイドの顔を除き込む。面白い程に真っ赤になつているセイドに吹き出しあつになりながらも。

「こつまにシア、落としたんだ？」

セイドの性格を考えればそんな訳はないことはわかっているが、リラは敢えて口に出した。全てはセイドをからかうためだ。リラが言い終わるや否や、セイドは全力で首を横に振り否定する。案の定な反応にリラは楽しくて仕方がない。

「んなつー、こ、これはつー！」

「んだよー。落としたんじやねえのかよ？」

「んな訳ない……つ」

「だつてこんなシチュエーション……。夜の間に頑張つちやつたか

と

「頑張るつて何を……つ」

「ん……」

病院であるのにも関わらずギヤアギヤアと騒ぐセイドとリラの声に、シアも目を覚ました。ゆっくりと顔を上げると、シアは何処か

宙を眺めている。相変わらず焦点の定まらぬ目をしているが、より一層どこを見ているのかわからない。

「シア？」

寝惚けた様子のシアに、リラが呆れて声をかける。シアは声のした方にゆっくりと反応。

「リラ。いたのか……」

顔を真っ赤に染め上げたままのセイドが、声を裏返しながら呟つ。

「ああ、あせいで。起きたのか？」

ハタチ

シアはまだどこか寝惚けたまま。思ったよりも寝起きは悪いらしい。トロンとした瞳で口を開く。隣でお前が寝てたから、と。得に深い意味はないらしい。なんともシアらしい答えトリラは感じた。

「アーティスト」

少しして、ようやくと完全に目を覚ましたらしいシア。改めて辺りを見回し、昨夜ベッドの上でも抱いた疑問をぶつけた。

「だ？」「うそだ？」

「ああ。JJIは病院

「病院？ なんで病院なんかに……？」

その時、シアは何かに気付きた言葉を詰まらせた。無表情ながらも若干、表情も強張ったのだが、それに気付く者は少ない。シアの視線の先には、セイドの胸に巻かれた包帯。そつと手を伸ばした。

「セイド……。本当、この怪我、どうしたんだ？」

「え……」

セイドは声を詰まらせた。

倒れる前のシアもやはり、怪我のことを聞いて来た。自分でやつたもので、しかもその直後であったのにも関わらず。やはり覚えていないのか、と疑問を持つ。また、だからと言つて『シアがやつた傷だ』とは、言つ気もなれば言つたくもなかつた。

むしろ、未だセイドは信じたくない。そう、考えていた。

痛くないのか、と聞くシアにセイドは、今はね、と焦りつつ答えるしかなかつた。

その場にいる者は皆、不思議でならない。

あれだけの騒ぎを起こしたシア。なのに何故、そこだけスッポリと記憶が抜け落ちているのか……？

「シア……？」

フロンが静かに口を開く。神妙な顔をして。

「フロン」

「ねえ、シア。どうしてセイド君がこんな怪我を負つたか、本当に

覚えてないの？」

シアは今、左耳のピアスが外れている。ピアスについている間の記憶は一切覚えていない様になっている。本当に何も覚えていない、むしろ知らないことなのでキョトンとするだけ。

「覚えているも何も、全く知らない……」

ルインに操られている間の記憶のないシアからすれば、気が付いたらあの場所にいて、周りに怪我して倒れている人がいて、目の前には血を流したセイドがいた。説明を請いたいのはシアの方である。

ホントに、覚えてないんだ。

シアの態度を散々見て、セイドようやつとそう確信した。と同時にシアが『元に戻った時』を思い返す。シアの左耳に付いていたピアスが取れた時、シアは元に戻った 様に感じた。やはりあのピアスが何かしら関係してゐるではと、いう考えに辿り着く。そして、もとに戻る、と同時に記憶も抜け落ちてゐるでは……、と。

「そうだ」

セイドの思考を遮る様にシアが声を上げた。シアは、フロンに根掘り葉掘り聞かれてルインの存在を思い出していた。

「昨日、目が覚めたらアイツがいた……
「アイツ……？」

あまり表情の動かないシアが神妙な顔をする。セイドの疑問にシアは神妙な瞳で宙を眺める。脳裏には、不適な笑みを浮かべるルイン

ン。

「名前は、分からない……。けど、『アイツ』は私に唯一記憶のある1
3才の時に、ずっと側にいた男だ……」

皆に衝撃が走る。とつさにリラが口を開く。

「何處で会つたんだ?」

「わからない……」

シアは少しうつ向く。地球ではあつたとは思つ、と付け足した。
シアの言葉に沈黙が訪れる。皆、言葉を無くし、息を飲む。

セイドは困惑した瞳でシアを見つめ、考えた。シア以外のこの場
にいる者、全てが似た様な考えに辿り付いていた。その怪しすぎる
『アイツ』の存在に。

その『アイツ』が、シアをどうにかしたのでは?

病室の入り口。そこに佇む一人の大柄な白衣の男。ルインである。
シアを尋ねて来たが先客がいたため立ち聞きをしていた。遅れを取
つたことに、鋭い瞳を更に鋭くさせて苦々しく舌打ちをした。

ルインは、核に侵入するにあたり、『新しく入った科学者』として正式に核の研究所に籍を置いていた。が、夜間の病院に見舞いとして行くと流石に目立つので控えていた。更に昨夜は、『シアに起

『この有り得ない変化』について考えるのに費やしていた。

初めて、勝手に元に戻ったシアのことを。

「なんなかしら。その『アイツ』つて……」

フロンが呟く。が、誰一人答えは持つ者はいない。シアですら、名前も知らない相手。皆、黙り込む中、チエスターが口を開く。

「那人、地球人じゃない……、ツスよね？」
「多分……」

シアがボソッと答える。答えはするが、シアにも確信はない。

ルインは、シアが13の頃。ずっとと言つても良い程側にいた男であつた。だが、今にしてかんがえるとその男が何て星の人間なのか、年齢も名前すらも知らなかつた。当時何も疑問を抱かなかつた自分自身が、今のシアにとつて疑問となつた。

得体の知れない『アイツ』の存在に皆、何を言つてよいのかわからぬ。口を噤み、重たくなるばかりの空氣。しばしの沈黙。

セイドはちらりとシアを見た。シアは無表情に近いながらも少し眉を潜めている。そんなシアをセイドは見据えた。そして、あることに気付く。

「シア」

うつ向いていたシアがゆっくりと顔を上げる。真っ直ぐにセイド

を見返すシアの瞳。セイドはそっとシアの顔に手を伸ばし、優しく頬を包み込む。シアの瞳をじっと見つめる。

「なんか、一昨日よりも田がほつきつしてゐる……」

セイドが呟く。が、唐突で尚田つこまつち意味のわからない抽象的な言葉に皆は田を点にする。

「は？」

「いや、なんて言つたか、一昨日は何処見てるか分かんないっていうか、目が虚ろっていうかだったのに……」

話しながらセイドは言葉を探す。シアの瞳を見つめつつ。

「灯りがともつた……、つていつか。

感情を持った、みたいな……」

感情……？

セイドの言葉からシアはルインに言われたことを思い返した。ふとシアの頭に、13才の頃の自分の姿が浮かび上がる。ルイン曰く『人形』だった時の自分を。それとルインに言われた一言、『何故そんなに感情豊かなんだ？』

私には、感情がなかつた……？

だけど、今は？

「お取り込み中失礼」

その時、部屋の入り口より張りのある男性の声が響く。皆、一斉に振り向く。そこに立っていたのは、背広を来た三人の中年男性。皆、一様に険しい顔をしている。キヨトンとしているセイド達。三人の中で真ん中に立っていた男性が前へ一步踏み出し、背広の内ポケットより掌コア程の何かを取り出し、セイド達に見せた。

その何かは核のボリス人間からすれば見慣れた大きさ・形。すぐになんだかわかる。身分証。それに書かれた文字は、POLICE。

「シンシアさん、ですね？」

警察です

セイド達に衝撃が走る。皆が図つたかの様に目を見開き、息を飲んだ。

「シンシアさん。一緒に来て頂けますね……？」

シアは怪訝な顔をしつつ、目を見開く。警察から、名指しで一緒に来いと言われる。記憶のないシアには、全く何故だかわからない。身に覚えがな過ぎて咄嗟に反応できない。

「ちょ、ちょっと待つて下さいっ」

呆然と三人の警察を眺めるシア。の代わりに、セイドが思わず声を上げる。咄嗟にシアの肩に手をかけ、自分に引き寄せた。守るかの様に。

「シアにはあの時の記憶がないんですね。」

声を荒げるセイドに、警察の男性は冷静に答える。

「記憶がない?」

「そうですつ」

「それが嘘でも本当でも、殺人未遂にはかわりなことですよ」「それにしたつて……」

殺人未遂?

セイドと警察のやつとつに、シアは混乱する。急に出た思いにも寄りぬ言葉。驚きを、疑問を声に出したくとも声が出ない。心の中で疑問を問い合わせる。

「君は……」

必死にシアをかばうセイドに、警察は怪訝な顔をする。

「見たといひ彼女の被害者じゃないのですか?」

「……」

声にならない叫び声を上げたのはセイドヒシア。セイドは痛い所をつかれて。シアは……、我が耳を疑つて。

「なぜそんなに彼女をかばうのです?」

「か、かばつてゐるんじや……つ」

「セイドッ」

呆然としていたシアは、やつとの思いで口を開いた。聞きたいことは山ほどあつたが、あまりのことに頭がなかなか働かないでいた。頭の中でぐるぐると回るセイドの言葉を必死で整理しようとする。

被害者？

「『あの時』つていつだ……？」

シアは困惑した瞳で言つ。そんなシアの言葉にセイドは息を飲んだ。思わず、シアの知らないことを口走つていたことに気付く。

「『被害者』つて、『被害者』つてなんだ！？」

次第に声が大きくなるシア。返す言葉のないセイド。リラやフロン達もかける言葉もなく黙り込む。怖い程に静まり返つた病室。シアの静かな声が響く。

「もしかして、お前のその傷は、私が、やつたのか……？」

私は、何をやつたんだ……？

「ち、違つ……」

セイドは思わず叫ぶ。

「シアッ。違うんだ……」

「じゃあ」

気付かれたくなかったこと、気付かせたくなかったこと、認めた
くなかつたこと。自ら気付かせてしまつたセイドは、悲痛な声で叫
ぶ。シアは静かな声でそれを遮る。だがそれは、余りの予想だにし
ない出来事に、シアの頭が対応仕切れていないがゆえであった。
普段感情といつものがイマイチ感じられないシアだが、さすがに
動搖する。

「その傷は、セイド負つたんだ？」

痛い所をつかれ、なんとか誤魔化そうとセイドは声を大にする。
それほどまでにセイドは、シアが自分を傷付けた事を認めたくは
なかつた。

「だ、だから、これは……。ほりひ、兵士の訓練室で……。」
「嘘をつくな！」

セイドの態度にシアは気付く。セイドの傷は自分が付けたこと。
そして、セイドは必死に自分をかばおつとじつてくれてこなことを。

「だつたらお前、なんであんな所であんな格好のままフリフリして
いたんだ？ そんな所で怪我したのなら、手当の一つや二つ、受
けてるはずだろ？！」

あまり感情出さないシア。そんなシアの心からの叫び。セイドは
もちろん、リラもフロンもケント達も、言葉を無くしただ神妙にシ
アを見つめる。

「記憶がないといつのは本当の様ですね」

しばしの沈黙を破り警察の男性が口を開く。

「まあ、記憶がないのなら催眠療法でもなんでも……」

「うふふ」

警察の言葉にセイドは声を荒げた。しかし、警察はそんなことには構わず話を続ける。

「シンシアさん。一緒に来て頂けますね？」

「うううと……」

「行つたら……」

セイドの顔を遮りシアが小さく口を開いた。小さな声が、響く。セイドもカラ達もシアに視線を向ける。

「もし行つたら、記憶が戻るのか……？」

神妙な顔でシアは呟つ。我が耳を疑つセイド達。

「ああ。戻りますよ」

「シアツー！」

引き留める様に叫ぶセイド。だが警察の言葉に、シアの瞳に何かの決心の色が浮かぶ。

「行へ……」

シアは立ち上がる。思わず呟ぶセイド達。

「シアツー？」

「セイド？」

シアは直ぐ様口を開く。まだ、何処か戸惑つた顔はしているが、決心による張りのある声で。

「私は、記憶を取り戻したい」

静まり返る病室。シアの真剣な想い。記憶を無くした者にとっての当然の願い。眞にもそれは痛い程伝わっていた。

「シア……」

呆然と呟くセイド。シアの想いを感じ、もはや引き止める術はなかつた。

シアはそのまま、警察の男性達の方へゆっくりと歩き出す。成す術無くシアを見つめるセイド達。

警察の手により、シアに手錠がはめられる。見たくもなかつた光景なのに、セイドにはスローモーションでも見て居るかの如くゆっくりと流れて行く。警察に拘まつてしまつたシアの姿に居ても立つてもいられなくなつたセイド。為す術ないながらもなんとかしようと、ベッドから降り思わずシアの腕を拘む。

「シアツ」

そう呼んだ直後、セイドは固まつた。セイドだけではない。リラもフロンもケント達も。

ふと、シアから柔らかな空気が流れる。シアがセイドに、微かな笑みを送つていたのだ。

予想だにしない見たことのないシアの姿に、呆然とするセイド。そんなセイドにシアは微かな笑みを浮かべたまま、優しく囁いた。

「もういい。セイド。もういいよ」

セイドの、シアをかばおうとこうう気持ち。シアにも十分伝わっていた。セイドの傷は自分が付けたのである。必死なセイドの姿はシアの心に染み渡っている。なんとも、シアにとつて形容しがたい暖かな気持ちが膨れ上がる。

ルイン曰く感情を持たずに産まれてきたはずのシア。そんなシアに産まれた感情。

『嬉しい』

微かながらも笑みが産まれていたのはそのためである。

シアはそつとセイドの今は傷を塞ぐ為の特殊な包帯に包まれた胸に手を伸ばす。手錠がはめられると言つても、手錠は無線でコントロールする為の機械であるため、普段は自由に手を使える。

「「」の傷……」

シアの顔から笑みが消え、謝罪の色に染まる。

「「」めん」

殆んど無表情であつたことを忘れさせる程、シアから現れる表情。引き留めるはずだったセイドは、シアの表情に目を奪われ息を飲む。それこそ、為す術がない。

「シ……」

やつとの想いで声をあげたセイドの口を、シアが手でそつと塞ぐ。

なんとも柔らかな優しい感触に何も言えなくなつたセイド。シアはそのままその手をセイド首にまわす。そつと、もう片方の手も首へと添えられる。両の手は自然セイドの顔を引き寄せる。自身も頭一つ大きいセイドに向けて背伸びをする。そつと目を閉じる。

何が起きて居るのかわからぬセイドはただ呆然と目を見開き、されるがまま。近付いて来るのはシアの顔。初めて『愛した』を教えてくれた女の顔。

シアはセイドの脣、の左端にそつと口付けた。

セイドは、我が身に起つたことが理解出来ない。生まれて初めての、左端とはいえ唇に感じた柔らかな感触に思考回路はショートする。リラ達も、突然の思いもよらぬシアの行動に目を丸くするばかりである。

静まり返る病室。

シアの、セイドへの微妙な位置のキス。優に5秒は越える長目のキスの後、シアはそつと手を離した。

セイドは未だ理解しきず。衝撃があまりにも大き過ぎた。目を見開き、静かにシアを見下ろす。

何を、やつてるんだ……？

シアは自分自身へ疑問を投げ掛けた。

セイドへの口付け。考えて出た行動ではなく、自然と出た行動であつた。勝手に体が動いて居た。セイドの、自分をかばおつしてくれる心、心配してくれる心、セイドの想い……。それをひしひしと感じ、不意に体が動いていた。

理屈ではない行動。

「行きましょうか」

静まり返る病室に、警察の男の低い声が響く。シアは背中を押され病室を出て行く。呆然と固まつたままのセイド。啞然と固まつたままのリラ達。引き止める言葉は、誰の口からも出でてはこなかった。

警察か……。

シアが警察に捕まる所を見届けたルイン。仕方なく研究所に戻つていた。

面倒なところに捕まつたもんだな。

軽く溜め息をつく。しかし、その直後。ルインの瞳には不敵な笑みが浮かんでいた。

だが、地球の文明じゃシアの記憶は取り戻せまい。

今……？

シアの出て行つた病室は、怖い位に静まり反つていた。シアの起

こした意外な行動に皆、ただひたすら呆然とするばかり。

「今のつて……、『ホッペにチュー』だろ?」

リラが呆然としながら咳く。リラのいる位置はセイドの背後にあたり。先程のシアの行動は、良くなは見えていなかつた。

不意に寄せられた外からの質問のおかげで、少し頭の整理が付いて来たセイド。とりあえず、リラの言葉には当てはまらないと思い、ただ首を横に振る。反応するだけで、瞳は未だシアの出て行つた病院のドアを凝視してゐる。

「えつ。じゃあマジにキス!?」

今度は首を傾げる。曖昧な返事に苛ついたリラは声を荒げる。

「どつちだよ!-?」

今の何……?

セイドは頭の整理は付いて来たものの、心では理解出来ていない。思いも寄らぬ、だが決して嫌ではない、むしろ嬉しいであろうシアの行動。頭では理解したがどうしてそんなことをして貰えたのかがわからない。

更に、その場所もまた微妙な位置で余計混乱する。リラに『どつち』と聞かれても、自分自身が『どつち』と聞きたい位であつた。『シアが警察に連れて行かれてしまつた』ことすらも、いまいち考えられない。

ただ脳裏に渦巻くのは目前に広がるシアの綺麗な顔。体験したことのない、唇に少しかかつた柔らかな感触。衝撃的なシアからの、

キス。

「なんか……、『Jの辺』？」

セイドは自分の唇の左端をそつと触れる。

「『Jの辺』……、『J』？」

顔に……？

シアに触れられた部分を自身で触れた。より一層鮮やかに蘇る心地良い感触。その瞬間セイドの顔は、耳までも真っ赤に染めあげられた。体中の血液が逆流を始める。

「お前もしかしながらもファーストキスか……？」

尋常じやないセイドのほてらせ方に飽きれ顔のリカ。

「え？　#面のシアのこと？」

シアが警察に連れて行かれたからじまびく。よつやつと落ち着いたセイドに、フロンが切り出した。

その間、病室は怖い位に静まり返っていた。#面、記憶がなかつたとは言え、何一つ言い逃れ出来ない様なシアの身の上に起ころる事態に言葉もなくなっていた。

そんな中、フロンがセイドにボソリと呟いた。『#面見たシアのこ

とを話してくれ』と。

「ええ。何か……、分かることがあるんじゃないかなって……」

フロンは苦し氣な表情を浮かべる。フロンの言葉にセイド納得。記憶を辿る。

セイドの脳裏に、4年前のシアが、色褪せることなく浮かび上がる。空襲警報の中、非難所を手指し走るセイド。ふと耳についた物音に何の氣もなしに足を止める。そこで見つけた怖い程綺麗な娘。たくさんの惨殺死体の真ん中に佇むシア。

光の反射で青く光る銀の髪と雪の様な白い肌に、艶やかに映える血。血の如く赤い、宝石の様な瞳。宝石の様に輝くのに、意思と言ふ輝きは見えて来ない空ろな瞳。

目が合つた。やつ思つたのはセイドだけなのか。

そして、幼い4年前のシアの記憶に触発されるかの様に思い起される昨日のシア。たくさんの怪我人の真ん中に佇むシア。

「シアが……、保護された時と同じだよ」

神妙な顔で呟くセイド。

今までは、『シア』という少女だけを気にして、シアの不可解な状況にはあえて目をつむっていたセイド。だが、ここへ来てそういう訳にも行かなくなつていた。

シアを助けたいのであれば、それはすなわち全てを受け止めなくてはならない。

「え……？」

セイドの言葉に、フロンは目を丸くした。直後、怪訝な顔に変わ

る。

「『保護された時』って、あの惨殺された人達の真ん中で……、つていうあれー!?」

「うん」

思わず口調が強くなるフロン。それに対し、セイドの言葉には力はない。

「ただ……、氣絶してたんじゃなくて、立つてたけど」

確かにこの目で見たシア。惨殺死体の真ん中に佇む血まみれのシア。その血は、どう見ても返り血であった。が、セイドは未だに信じたくない気持ちが大きい。

あの惨殺死体は
シアがやつたのではなく
他の誰かがやつて
シアは唯一助かつた

被害者なのだと……。

「フロン?」

不意にリラが声をあげる。フロンが余りにも神妙な顔で氷りついていたからだ。リラの声にセイドもフロンの様子に気付く。その神妙な氷りついた顔はフロンだけではなく、ケントとユリも浮かべていた。

「それ、いつの話……?」

フロンはボソッと言つ。フロン達の様子に首を傾げるセイド・リラ・チエスター・キャリオ。ただ、表情から只事ではない雰囲気だけ感じ取る。

「え？ 僕が15の時だから4年前……？」

「4年前……！？」

首を傾げつつセイドの言葉に、フロンとケントとゴコの表情は更に氷りついた。

「ねえ、フロンっ。それって……っ」

思わず口を開きつつも、言葉を詰まらせるゴコ。

「な……、なんだよ……」

ただならぬ雰囲気に、リラは困惑しながらも口を開く。セイドは眉間に皺を寄せ、言葉なくフロンを見つめるだけ。

フロンとケントとゴコは、氷りついた表情のまま顔を見合せた。病室の中に重たい空気が流れる。深刻な表情で顔を見合せたまま言葉を無くすフロン達。

そんなフロン達の反応にセイドは嫌な予感がしていた。何かはわからない。何か、悪寒。

「な、何……？ ねえ、一体何を知ってるのー？」

嫌な予感はすれど、聞かずにはいられない。セイドは、必死な面持ちで口を開いた。

フロン達は再度顔を見合わせる。田だけで何かコンタクトを取り、

3人で頷いた。そしてフロンが深いため息の後にセイドの方を向いた。真剣で、神妙な表情。言い難そうに口を開く。

「セイド君。誰にも言わないでね。リラも、キャリオもチエスタも……、黙つてね」

重たい空気を更に重くさせたフロンの言葉。病院内のざわめきなど、もはや誰の耳にも届かない。セイドに至っては若干早くなつた自分の動悸ばかりが耳についた。静かに話しているはずのフロンの言葉が、病室内に響き渡る。

「これは、核コアの中でもある程度位が上の者じゃないと……、知らないことなの」

小さな部屋に機械音が響く。大きな機械に大きな窓。

静まり返る部屋には白衣を来た男が2人。窓向こうには、大きく背もたれが傾いた椅子。座ると言つよつ寝るに近い椅子にシアが座つていた。

シアはイヤホンの様なものをつけ、静かに目を瞑つてている。すでに催眠状態になつていた。

ここは、核コアの警察。警察病院。

今まさに、シアの記憶を取り戻すための催眠療法が行われようとしていた。

白衣を着た男のうちの1人が、大きな機械に着いたマイクに向かう。このマイクは窓の向こう、シアのつけるイヤホンへと繋つている。催眠のための特殊なもの。

『シンシア。これからあなたはゆっくりと記憶を遡ります』

白衣を着た男、心療内科医が静かに語りかける。ゆっくりとシアに記憶を遡る様導いて行く。

言われるまま記憶を遡る催眠状態のシア。走馬灯の如く次々とシアの脳裏を駆け戻る記憶。が、不意に。

脳裏は暗闇に襲われた。

『シンシア。あなたは今、17才です。何か見えますか?』

イヤホンを通し、直に脳に響く医者の声。見えるものを素直に答える。

「暗い……」

核。^{コア}研究所。

一人の白衣を着た若い男が廊下を歩く。乾いた足音が響いている。その足音を耳を傾け、少し先の廊下に佇む一人の男……、ルイン。

「おい」

若い男がルインの前に差し掛かった時、ルインは口を開いた。

「はい」

若い男は声に反応し視線を向ける。ルインはそのまま静かに口を開く。

「お前は、今日入った新しい遺伝学者だな？」

「え……。はい。そうですが」

「名はなんと言つ？」

理由も言わず、不躾な質問。だが有無を言わざぬ威圧感を纏うルインに若い男は気押さる。この男は博士号を取得した学者であるが、まだ若干二十才。更にこの研究所に入つて間もないこと、地球最高峰の核の研究所に実をおけることで緊張していた。

「ヴィル。ヴィルシェイ＝ガ……イル」

若い男が口を開き始めた時、ルインは右手を若い男、ヴィルシェイ＝ガイルことヴィルの顔にかざした。その右手の人指し指には銀色の指輪の様なものがはめられている。赤い宝石の様な物がついている。その赤い物は、手の平の方に向いており、ちょうどヴィルの左目の目前、ホンの1cmほどのところにあつた。

急な出来事に反応出来ずにいるヴィル。ピッ、という、微かな機械音が響く。ヴィルの目前にかざされた指輪の様な物から細い光が出ていた。その光はヴィルの左目に直接当てられていた。

5秒程のち、ルインは静かにかざしていた手を退けた。ヴィルの瞳から、意志が消えた。

焦点の定まらない虚ろな瞳のヴィル。ルインはそんなヴィルを見て、不適な笑みを浮かべる。

そのまま、ルインは静かに歩き出す。ヴィルもまた静かに歩き出

す。

何も言われずとも、田すい合せすと、も、ラインの後を付きます。

従つ様に。

「ア
核の中でも、位が上じやないと知らなこと?」

フロンの言葉を反芻する。セイドは神妙な瞳で、呆然とフロンの話に耳を傾ける。いろいろなことが一度に起り過ぎて、もはや言葉が出なかつた。

核の中でも位が高くなれば知らないこと。フロンは数少ない宇宙博士ということで特に要職に着いている訳ではないが位は高く、ケントとコリはそれぞれ軍医と軍属の看護師の主任ということで位が高かつた。

「それで、なんなんだよ……。それ」

リラが口を開く。病室内の重たい雰囲気に流石のリラも口が重たい。フロンは自分で言い出したにも関わらず、言い難そうに顔をうつ向かせた。それは、ケントとコリも同様。

数秒の沈黙。

の後、決心したフロンがゆつくつと口を開く。

「あのね……。実は、この宇宙戦争が始まつた頃からあつたのよ。

「じつは……」

あからざまな言葉を選べずに、ヴェールで包むかの様に言葉を濁すフロン。が、皆は瞬時にその意味を理解し田を見開く。『こいつ言つこと』。つまりは。

「数人の国民が惨殺される、なんてことが……？」

放心したかの様に、魂が抜けたかの様にセイドが呟く。セイドの言葉にフロンは無言でうな付く。リラが病院なのにも関わらず思わず声をあらげた。

「な、なんで公表しねんだよっ！ 危ねえじやねえか！？」

リラはフロンに詰め寄った。途中ケントに『病院だから』と止めたが構わずに。初耳のとんでもなく危険な事態に田へじりを立てる。フロンはつづ向き、重たい雰囲気の中呟く。

「公表なんてできる訳ないじゃない」

「んつでだよ！？」

「わかんないの！？」

不意にフロンの声も大きくなる。思わずフロンの返しにリラは押し黙る。フロンは神妙な顔でリラを見上げてい。ただならぬ、雰囲気。

気。

「こなこと公表したら……、どうなると悪い？」

フロンの静かな声が響き渡る。

「大パニックになるわ」

皆、息を飲む。

「これは、全くの神出鬼没で、しかも1回で数十人……、下手したら3桁の人達が亡くなつてたのよ？ 更に惨殺されて……、なんて振り絞る様なフロンの声。皆、何も言えず静まり反つていた。皆、ただ意味が分からぬ。様々な思いが頭を巡る。そんな中、皆が辺り付いた当然の疑問……。

その事件が起き始めた時期と、そこにいたことが明確なシア、2回も目撃されている事実。そこから、生まれる疑問。

この事件にシアは関わっているのか？

パツとスポットライトの様な光がシアの上に降り注ぐ。

『シア。目を開けて下さい』

警察病院。

寝ているも同然な椅子の上、シアはゆっくりと催眠状態から抜け出して行く。目を、開ける。白衣を着た中年の男性、警察病院の精神科医が静かにシアのいる部屋へと赴く。

「シア。本当に何も見えなかつたのですか？」
「真つ暗だつた」

シアは、無言で頷いた後に咳いた。

催眠療法による無くした記憶の再生。だが、催眠療法にやつて時間と遡つたはずのシアが見たのは暗闇だった。一点の光も差さぬ闇の世界。

催眠療法でも蘇らないのか……。私の記憶は。

軽い溜め息と共にシアはどこか遠くを眺める。

簡単に記憶を蘇らせることができると思つていていた医師達は田を丸くしつつも、次の記憶再生の方法を談義し始める。そんな医師達の姿にシアは再びため息をついた。

医師達ではなく、自分の体に起るシア自身にもわからぬ事態へ。

視線を上げ、無機質な病院の白い天井を眺める。不意に、セイドのことを思い出す。

セイド……。

心の中でそつと語りかける。

お前何か知らないか……？

第5話 かすかな灯 暗^{ブラック} 終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4400a/>

SINCERE シンシア

2011年1月14日03時56分発行